

# みやぎ食の安全安心消費者モニターアンケート

## 調査結果報告

アンケート対象者 「みやぎ食の安全安心消費者モニター」765人(平成24年7月1日現在)

アンケート回答者数 412人(回収率 53.9%)

調査実施期間 平成24年7月

アンケート回答者属性

男女構成

男性	女性	不明
106	280	26

年代別内訳

30代	40代	50代	60代	70代	不明
33	68	72	117	95	27

未成年の家族の有無

あり	なし	不明
110	267	35

※男女間，年代間，未成年の家族の有無間の有意差については，有意水準5%で有意差検定を行っている。

### 《結果概要》

#### I 食と放射性物質について

9割弱の回答者が，放射性物質を気にしており，その理由も人体への影響の不安から検査結果への不信感，基準値そのものへの不安など幅広く，昨年同様不安を抱いている。

不安を抱えている食品としては，「魚介類」，「きのこ・山菜類」等で多く，すべての食品を選択した回答者も1割強いる。

食品の基準値についての認知度は6割弱で，よくわからないとする回答もあった。「基準値以下なら安心」より「基準値以下でも不安」がやや高い。昨年度は，「暫定規制値が低すぎる（厳しすぎる）」に対し「暫定規制値が高すぎる（甘すぎる）」が圧倒的に高かったのに対し，今年度は「厳しすぎる」が1.1ポイント上がり，「甘すぎる」が3.3ポイント低下し，冷静に判断しようとする傾向がある。その一方で，「よくわからない」とする割合が8.1ポイント高くなっており，放射性物質に対する漠然とした不安感は払拭されていない。

放射性物質の検出結果や出荷制限・解除に関する情報については，約2/3の回答者は確認しており，その確認方法はテレビ・ラジオ，新聞が圧倒的に多い。この傾向は昨年同様である。

基準値を超える放射性物質が検出された場合の対応としては，半数以上が「その農畜水産物については，他の産地のものを購入する」とし，「その産地の全ての農畜水産物について購入を控える」，「その農畜水産物については他の産地のものでも購入は控える」を大きく上回り，食品の選択について比較的冷静な対応を取ることがうかがえる。一方，一度基準値を超えた食品への対応としては，「検出されていても基準値以下なら食べる」はやや低く，「不検出なら食べる」とした回答が多く，当該食品に対する不信感の強さがうかがえる。

原発事故後の食品購入行動の変化としては，「産地表示を必ず確認するようになった」，「復興支援のため，宮城県産のものを積極的に買うようになった」が高い一方，「宮城県産以外のものを買うようになった」，「国産より外国産を買うようになった」は低く，昨年度同様，比較的冷静な対応がなされているようである。

#### II 食の安全安心について

8割の回答者が食の安全安心全般について不安を感じており，昨年度調査時（8割強）と大きな差はないが，不安の度合いは和らいでいる。

不安は，「残留農薬」，「環境汚染物質」，「家畜伝染病」，「残留抗生物質」等に対するものが強く，「環境汚染物質」への不安が依然として大きい。

今年度新たに項目に加えた「放射性物質基準値以下の食品の信頼性」については，比較的不安を感じていない。

食品の安全安心を確保するために大変重要だが，十分に行われていないと認識されている取り組みとしては，「違反，事件，事故の速やかな情報公開」，「食に関する正しい情報の提供」，「食品の衛生・監視指導の強化」等が上位にきており，昨年度同様，情報公開に関する意識の高まりが見られる。

# I 食と放射性物質について

## 問1 放射性物質について、どの程度気にしていますか。(単一回答)

- |               |              |              |
|---------------|--------------|--------------|
| 1 非常に気にしている   | 2 ある程度気にしている | 3 あまり気にしていない |
| 4 ほとんど気にしていない | 5 その他        |              |

放射性物質については、「非常に気にしている」(23.9%)、「ある程度気にしている」(63.2%)を合わせて87.1%と大多数の回答者が気にしており、気にしていない回答者は「あまり気にしていない」(11.5%)、「ほとんど気にしていない」(1.2%)を合わせても12.7%と少なかった。

男女間に有意差は見られない。

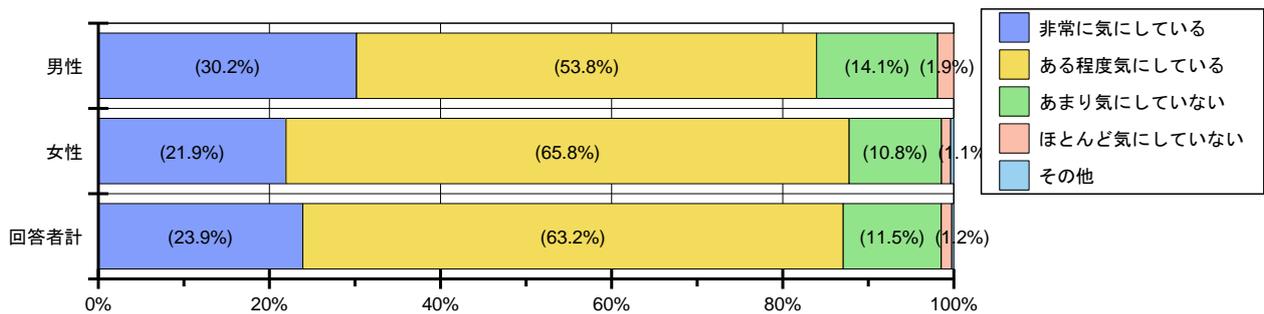


図1-1 放射性物質に対する意識 (男女別)

年代間では「ある程度気にしている」で有意差が見られ、70代以上では「非常に気にしている」の割合が高い傾向にある。年齢が上がるに従って「非常に気にしている」の割合が高くなる傾向が見られる。

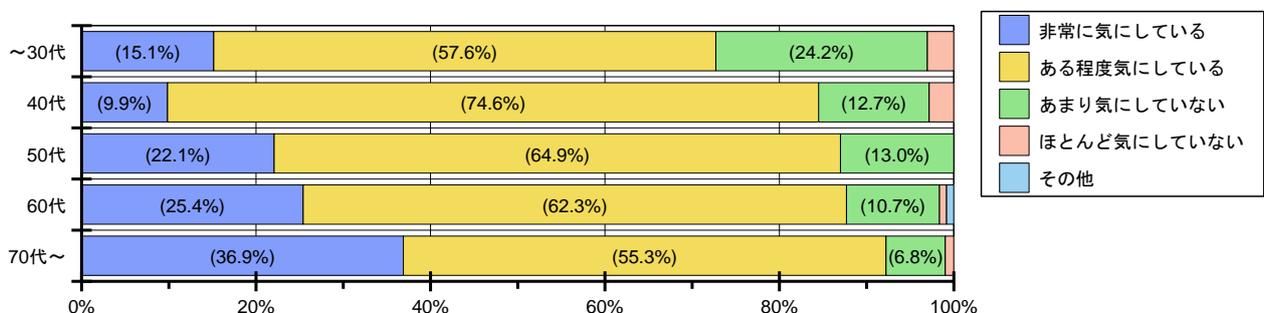


図1-2 放射性物質に対する意識 (年代別)

未成年の家族の有無間には有意差は見られない。

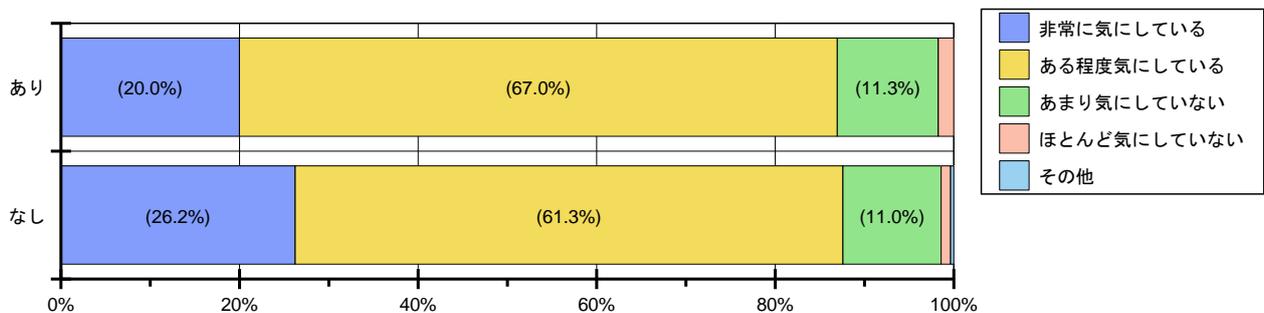


図1-3 放射性物質に対する意識 (未成年の家族の有無別)

## 問2 気にしている理由は何ですか。（複数回答）

- |                             |                         |
|-----------------------------|-------------------------|
| 1 基準値そのものが不安だから             | 2 検査体制が不安だから            |
| 3 公表された検査結果が信用できるものなのか不安だから |                         |
| 4 人体への影響が不安だから              | 5 そもそも放射性物質がよく分からず不安だから |
| 6 その他                       |                         |

放射性物質を気にしている回答者の理由としては、「人体への影響が不安だから」（29.1%）、「公表された検査結果が信用できるものなのか不安だから」（20.6%）、「検査体制が不安だから」（18.9%）、「基準値そのものが不安だから」（18.8%）の順であるが、全ての理由を選択した回答者も12.6%あり、依然として放射性物質に対する不安感の強さがうかがえる。

「基準値そのものが不安だから」の項目では男女間に有意差が見られ、男性の方が女性より基準値そのものに対する不安の割合が高い。逆に「人体への影響が不安だから」の項目では、女性の方が男性より人体への影響を憂慮する割合が高い傾向がある。

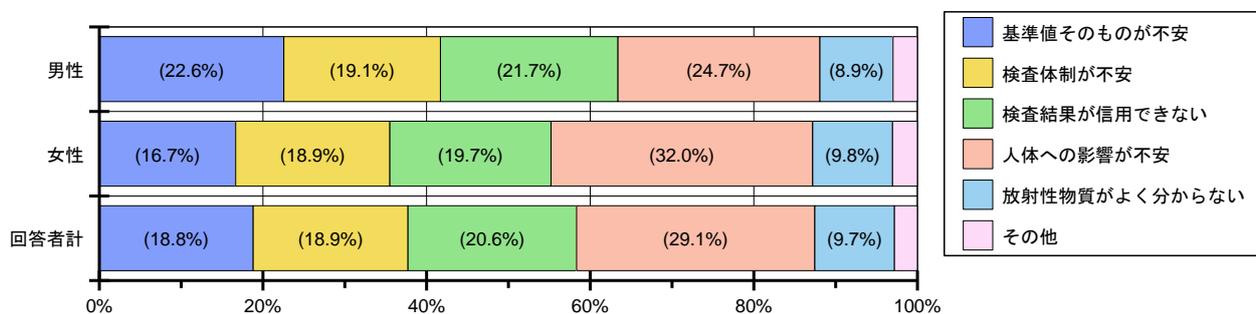


図2-1 気にしている理由（男女別）

年代間にも有意差は見られないものの、年齢が上がるに従って「人体への影響が不安だから」の割合が低下する傾向が見られる。

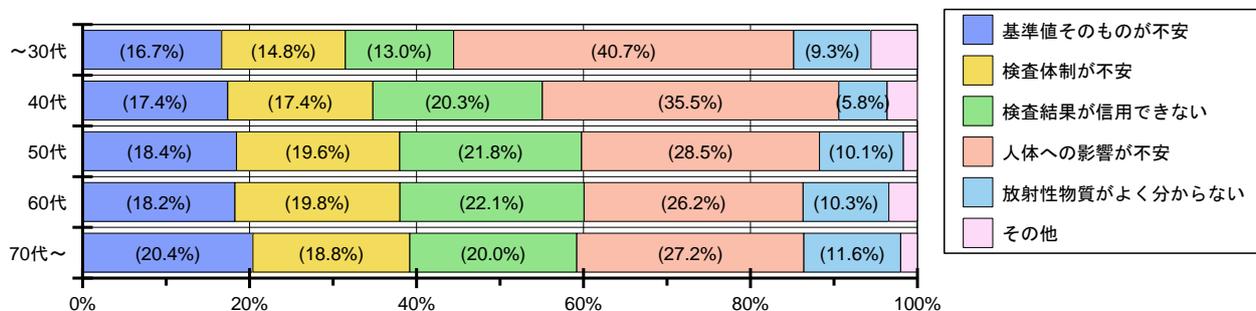


図2-2 気にしている理由（年代別）

未成年の家族の有無間にも有意差は見られないものの、未成年の家族がいる回答者の方が「人体への影響が不安だから」の割合が高い傾向が見られる。

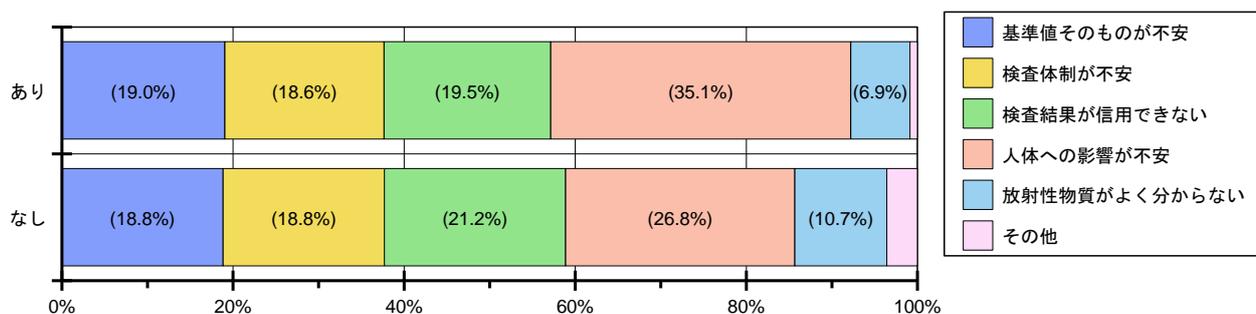


図2-3 気にしている理由（未成年の家族の有無別）

### 問3 気にしていない理由は何ですか。（複数回答）

- 1 基準値以下なら安全だと思っているから
- 2 検査が十分に行われていると思っているから
- 3 人体に大きな影響はないと思っているから
- 4 放射性物質による影響が出るのは先のことだから
- 5 放射性物質についてよく分からないので、気にしても仕方ないから
- 6 その他

放射性物質を気にしていない回答者は全体の12.7%と少ないが、その理由としては、「基準値以下なら安全だと思っているから」（33.3%）、「検査が十分に行われていると思っているから」（29.9%）が高かった。

男女間に有意差は見られない。

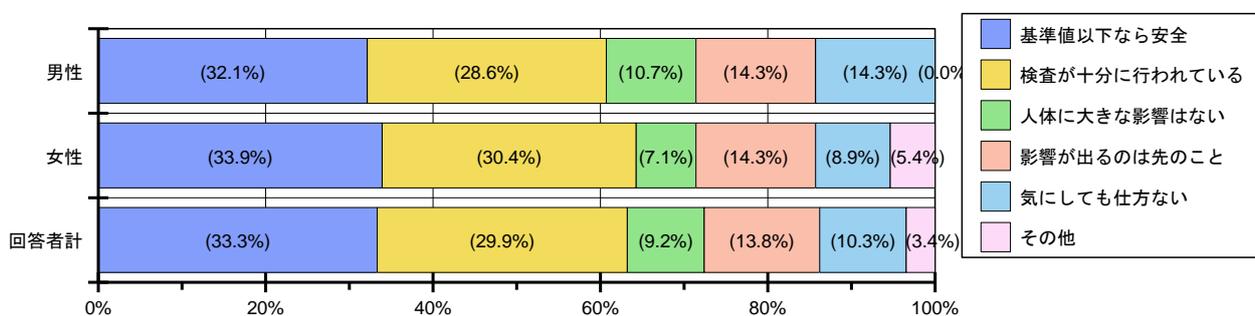


図3-1 気にしていない理由（男女別）

年代間ではバラツキが大きいように見えるが、これは回答者数が少ないためで有意差は見られない。

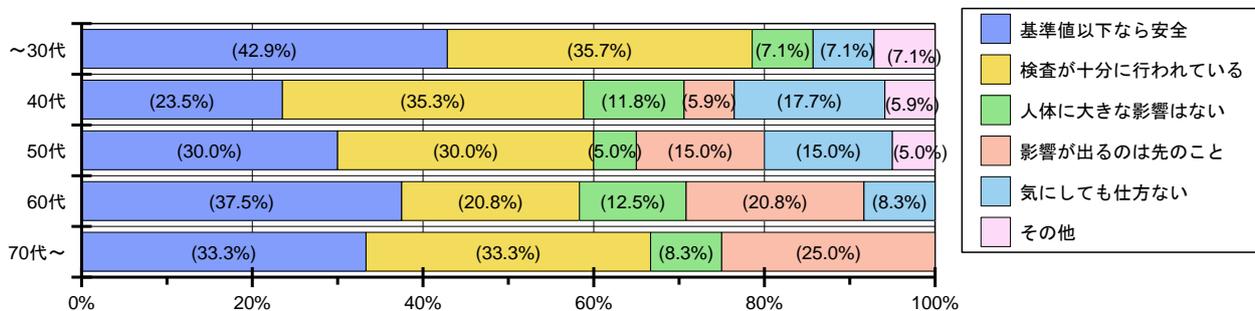


図3-2 気にしていない理由（年代別）

未成年の家族の有無間で「影響が出るのは先のことだから」の項目で有意差が見られる。

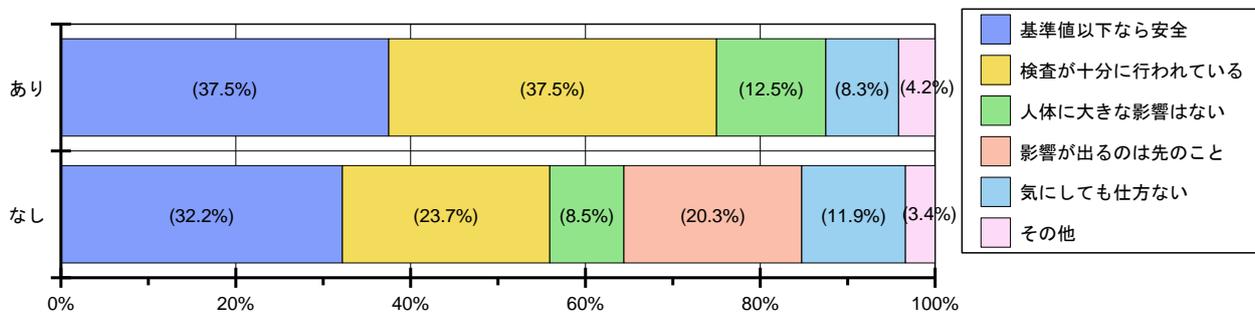


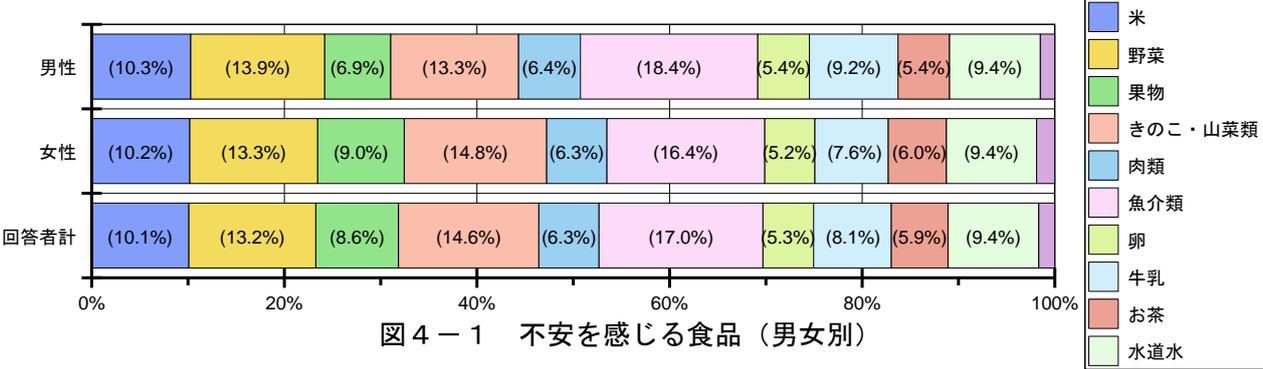
図3-3 気にしていない理由（未成年の家族の有無別）

### 問4 現在どのような食品が不安ですか。（複数回答）

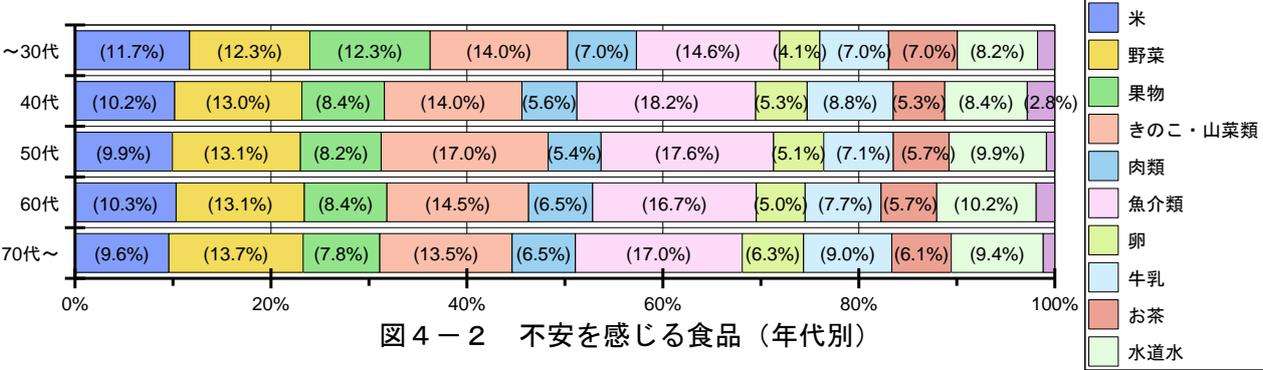
- |     |      |      |            |        |       |
|-----|------|------|------------|--------|-------|
| 1 米 | 2 野菜 | 3 果物 | 4 きのこと・山菜類 | 5 肉類   | 6 魚介類 |
| 7 卵 | 8 牛乳 | 9 お茶 | 10 水道水     | 11 その他 |       |

不安を抱えている食品としては、「魚介類」(17.0%)、「きのこ・山菜類」(14.6%)、「野菜」(13.2%)、「米」(10.1%)の順であるが、全ての食品を選択した回答者も多く、食品による大きな差は見られない。ただし、基準値を超えたと公表された品目「魚介類」,「きのこ・山菜類」について注視する傾向にある。また、「水道水」については、既に市販のミネラルウォーターに切り替えたとする回答者も散見された。さらに、「その他」の具体的な内容では、『これら原料の加工食品』や『すべての食品』の記述が多かった。

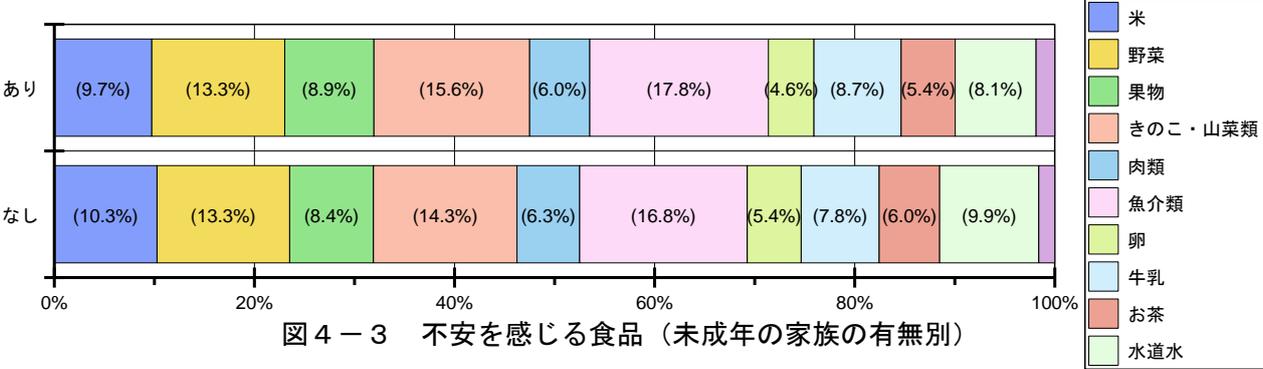
男女間では、「きのこ・山菜類」と「果物」の項目で有意差が見られ、女性の方が不安を感じる割合が高い。



年代間では有意差は見られない。



未成年の家族の有無間で有意差は見られない。



問5 平成24年4月から新たな基準値が定められましたが、一般食品の基準値として正しいものはどれですか。（単一回答）

1 500 Bq/kg    2 300 Bq/kg    3 100 Bq/kg    4 50 Bq/kg    5 その他

一般食品の基準値の認知については、「100 Bq/kg」と正しく認識している方が 59.1%と最も高かったが、「よくわからない」とする自由記述もみられた。

男女間に有意差は見られない。

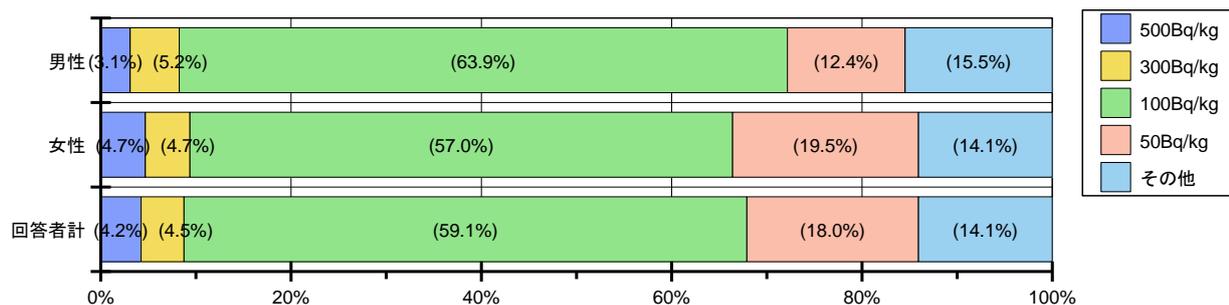


図5-1 基準値の認知度（男女別）

年代間にも有意差は見られない。

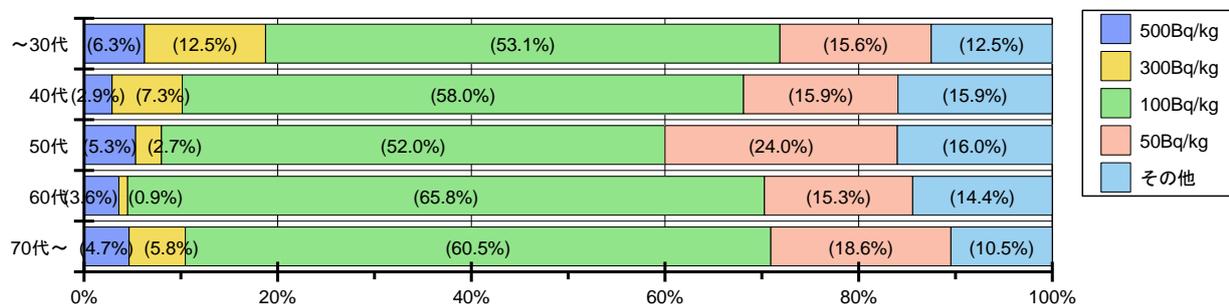


図5-2 基準値の認知度（年代別）

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

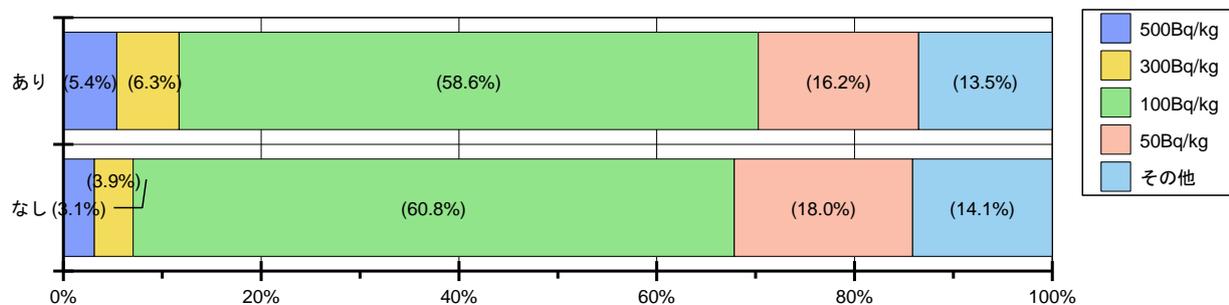


図5-3 基準値の認知度（未成年の家族の有無別）

問6 新しい食品の基準値について、どう思いますか。（複数回答）

- |                  |                   |
|------------------|-------------------|
| 1 基準値以下なら安心      | 2 基準値以下でも不安       |
| 3 基準値が高すぎる（甘すぎる） | 4 基準値が低すぎる（厳しすぎる） |
| 5 特に気にしていない      | 6 よくわからない         |
| 7 その他            |                   |

食品に対する基準値については、「基準値以下なら安心」との回答（28.4%）より「基準値以下でも不安」との回答（30.8%）の方がやや高い。昨年度は、「暫定規制値が低すぎる（厳しすぎる）」（1.9%）に対し「暫定規制値が高すぎる（甘すぎる）」（12.0%）が圧倒的に高かったのに対し、今年度は「基準値が低すぎる（厳しすぎる）」が1.1ポイント上がり（3.0%）、「基準値が高すぎる（甘すぎる）」が3.3ポイント低下（8.7%）しており、冷静に判断しようとする傾向にあるものの、その一方で「よくわからない」とする割合が8.1ポイント高く（20.2%）なっており、放射性物質に対する漠然とした不安感は払拭されていない状況にある。

「基準値以下なら安心」の項目では、男女間では男性の方が、年代間では60代以上が、基準値以下

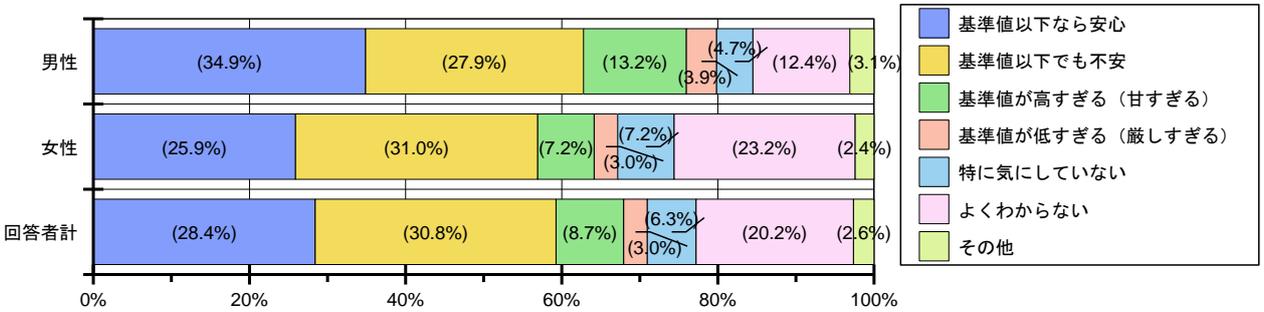


図6-1 基準値に対する意識（男女別）

なら安心と考えている傾向がある。

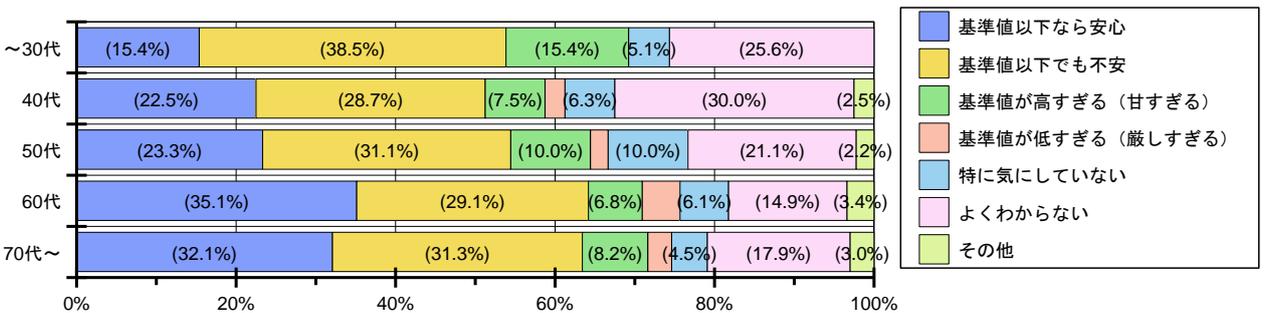


図6-2 基準値に対する意識（年代別）

問7 食品を購入するとき、行政が発表している放射性物質の検出結果や出荷制限・解除に関する情報を確認していますか。（単一回答）

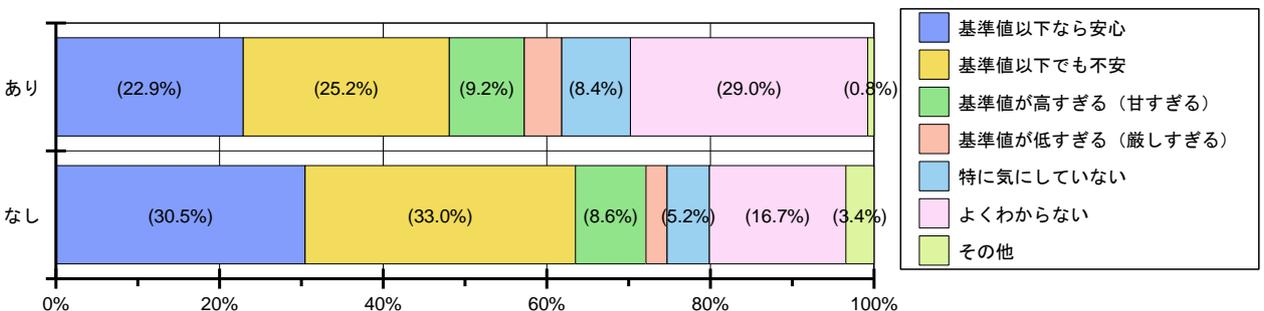


図6-3 基準値に対する意識（未成年の家族の有無別）

- |                             |           |
|-----------------------------|-----------|
| 1 必ず確認している                  | 2 たまに確認する |
| 3 売られているものは安全だと思っているので確認しない | 4 気にしていない |
| 5 その他                       |           |

放射性物質の検出結果や出荷制限・解除に関する情報については、「必ず確認している」(25.3%)、「たまに確認する」(39.5%)を合わせると約2/3の回答者は確認している。

男女間に有意差が見られ、女性に比べ男性の方が「必ず確認する」割合が高い。

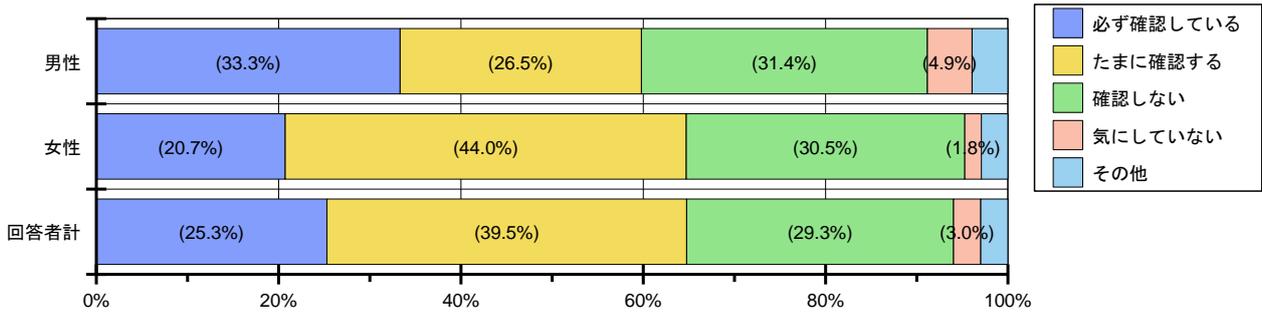


図7-1 放射性物質検出結果等関連情報の確認状況(男女別)

年代間に有意差が見られ、70代以上の方で「必ず確認する」割合が高い。

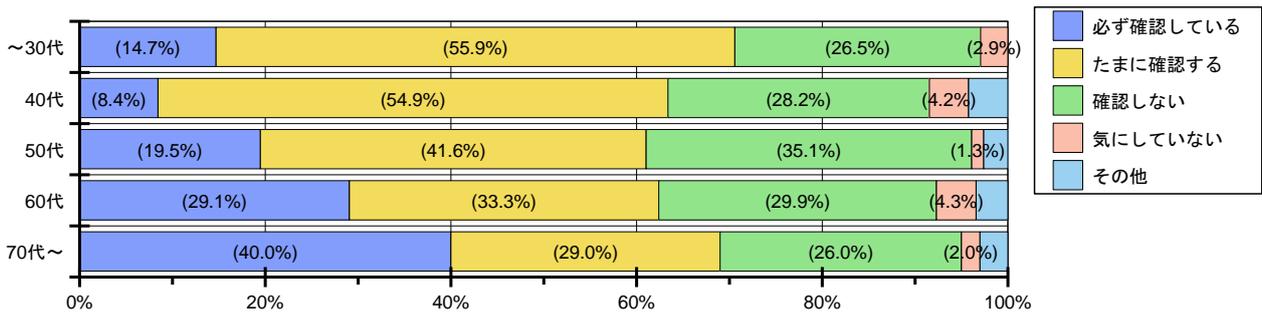


図7-2 放射性物質検出結果等関連情報の確認状況(年代別)

未成年の家族の有無間に有意差は見られない。

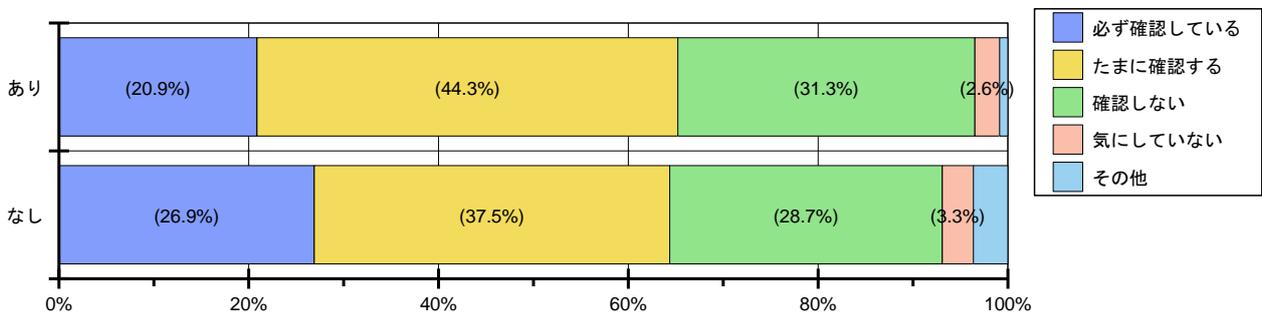


図7-3 放射性物質検出結果等関連情報の確認状況(未成年の家族の有無別)

問 8 放射性物質の検出結果や出荷制限・解除に関する情報を、どのように確認していますか。（複数回答）

- |              |       |           |        |
|--------------|-------|-----------|--------|
| 1 宮城県のホームページ | 2 新聞  | 3 テレビ・ラジオ | 4 店頭表示 |
| 5 家族・友人・知人   | 6 その他 |           |        |

放射性物質の検出結果や出荷制限・解除に関する情報の確認方法としては、「新聞」（33.3%）、「テレビ・ラジオ」（27.4%）が圧倒的に高く、次いで「店頭表示」が21.2%で、「ホームページ」を閲覧するのは1割程度である。

男女間では有意差が見られ、女性の方が「家族・友人・知人」からの情報で確認する割合が高い。

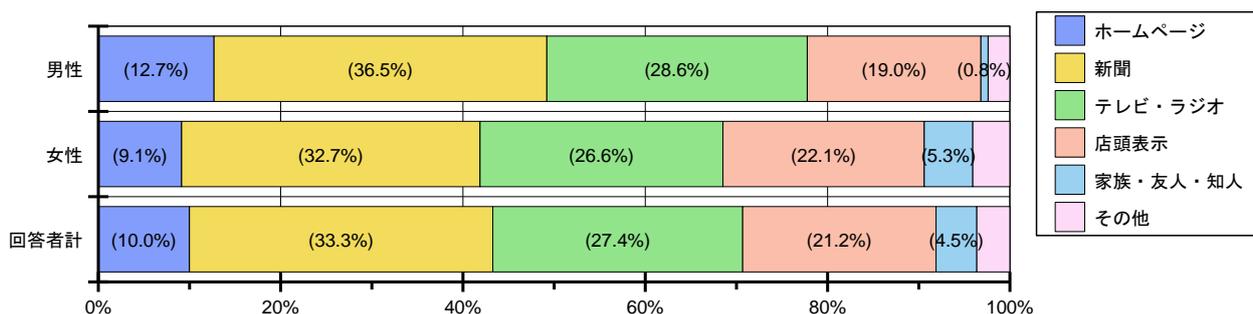


図 8-1 放射性物質検出結果等の情報の確認方法（男女別）

年代間では、70代以上で「ラジオ・テレビ」の情報を確認する割合が高い傾向にある。

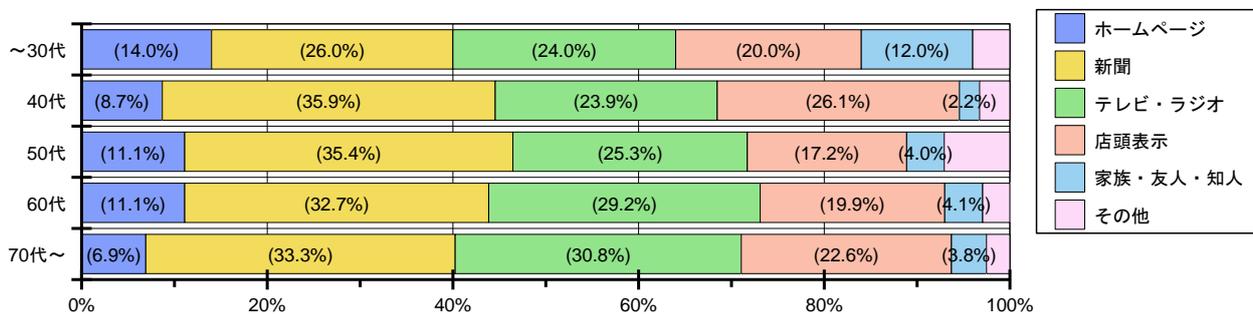


図 8-2 放射性物質検出結果等の情報の確認方法（年代別）

未成年の家族の有無間に有意差は見られない。

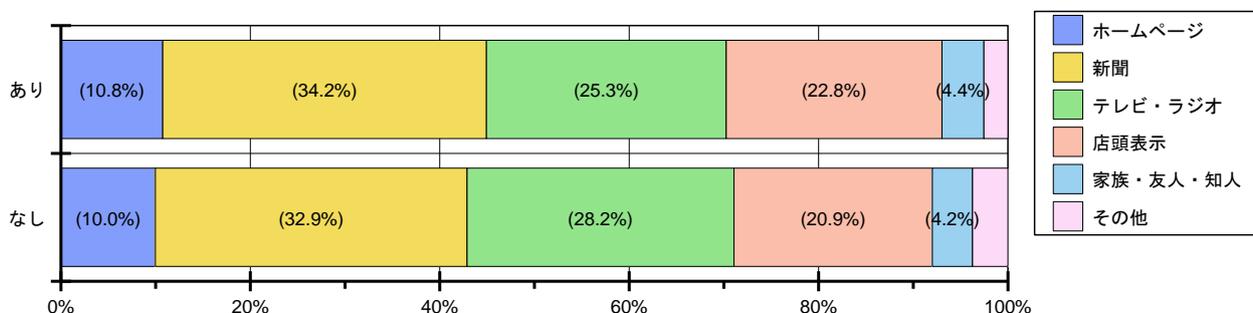


図 8-3 放射性物質検出結果等の情報の確認方法（未成年の家族の有無別）

問9 ある産地（市町村単位）で1つの食品について基準値を超える放射性物質が検出された場合の、あなたの購買活動についてお聞きします。（単一回答）

- 1 その産地の全ての農畜水産物について購入を控える
- 2 全てではないがその農畜水産物については、他の産地のものでも購入は控える
- 3 全てではないがその農畜水産物については、他の産地のものを購入する
- 4 特に気にせず購入する
- 5 その他

基準値を超える放射性物質が検出された場合の購買活動としては、半数以上（60.5%）の回答者が「その農畜水産物については、他の産地のものを購入する」と回答し、「その産地の全ての農畜水産物について購入を控える」（19.6%）、「その農畜水産物については、他の産地のものでも購入は控える」（10.0%）を大きく上回り、比較的冷静な対応を取ることがうかがえる。

男女間には有意差は見られない。

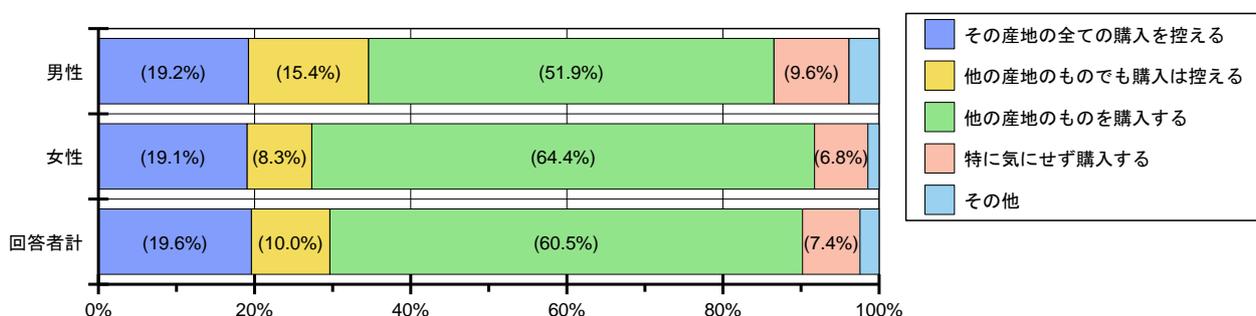


図9-1 基準値を超えた場合の購買活動（男女別）

年代間には有意差は見られない。

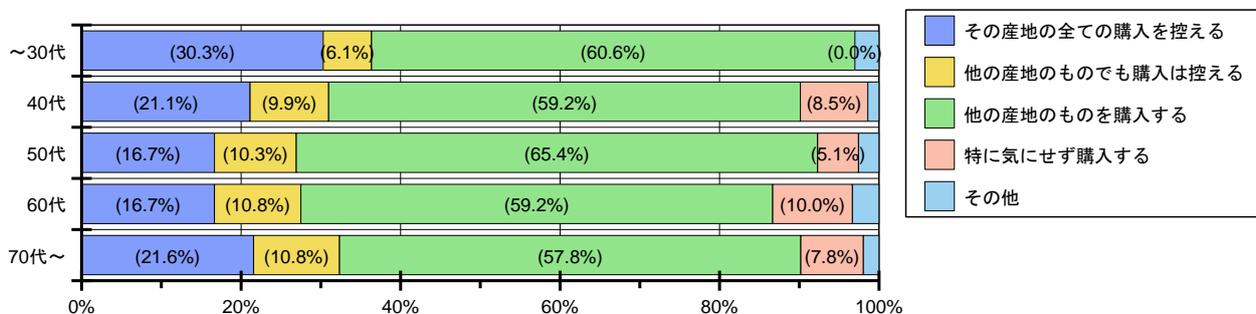


図9-2 基準値を超えた場合の購買活動（年代別）

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

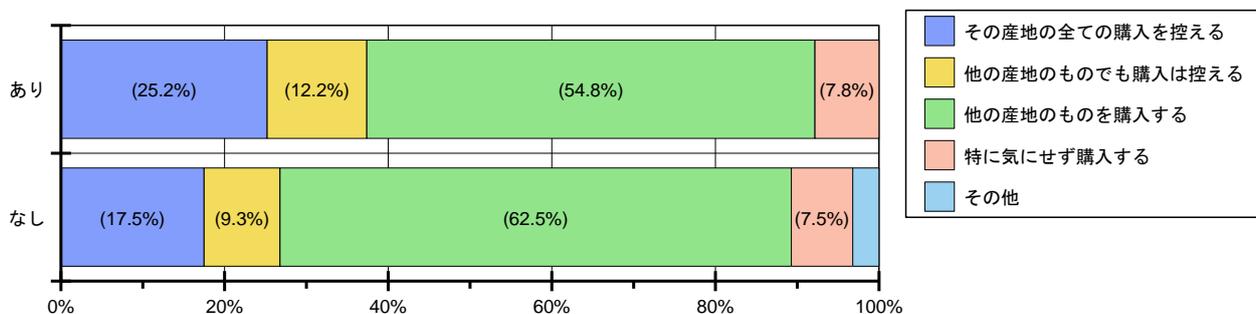


図9-3 基準値を超えた場合の購買活動（未成年の家族の有無別）

問10 一度基準値を超えた後に、基準値以下あるいは不検出となった食品について、あなたならどうしますか。（単一回答）

- |                          |            |
|--------------------------|------------|
| 1 検出されていても基準値以下なら食べる     | 3 不検出なら食べる |
| 2 基準値以下であっても検出されていれば食べない | 5 その他      |
| 4 不検出であっても不安なので食べない      |            |

出荷制限が解除された食品に対する購買活動としては、「検出されていても基準値以下なら食べる」は20.9%とやや低く、「不検出なら食べる」が39.1%、「基準値以下であっても検出されていれば食べない」が20.6%と、一度基準値を超えた食品に対する不安感・不信感の強さがうかがえる。

男女間に有意差は見られない。

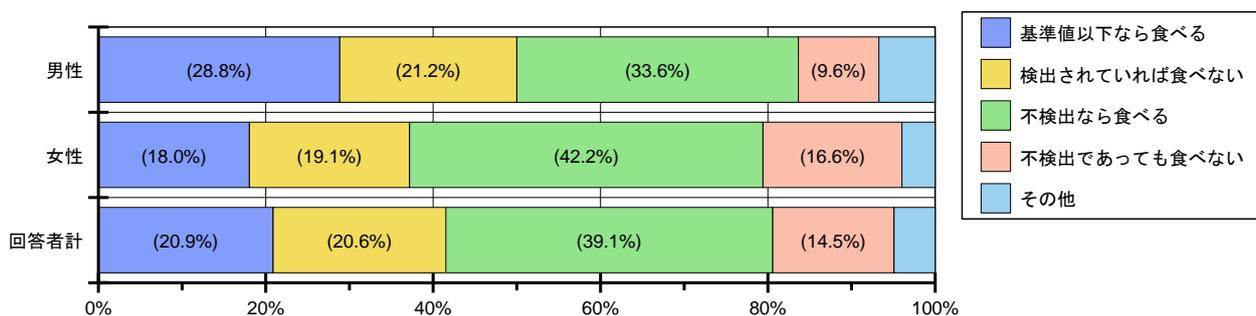


図10-1 一度基準値を超えた食品の購買活動（男女別）

年代間にも有意差は見られない。

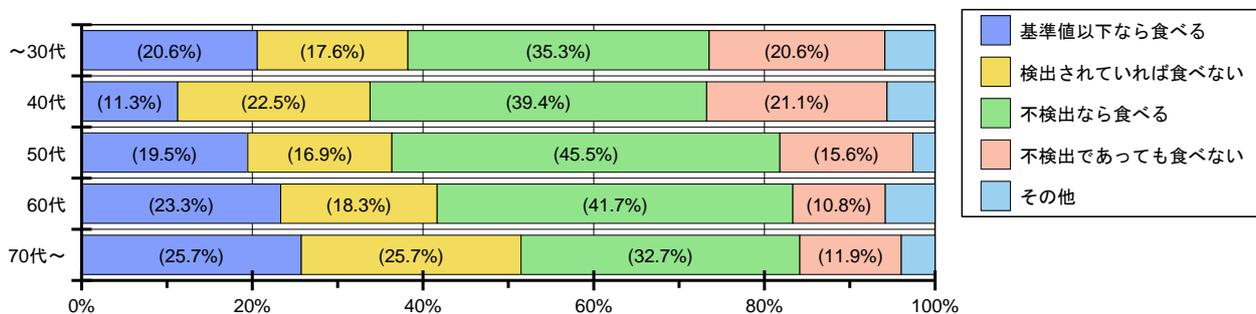


図10-2 一度基準値を超えた食品の購買活動（年代別）

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

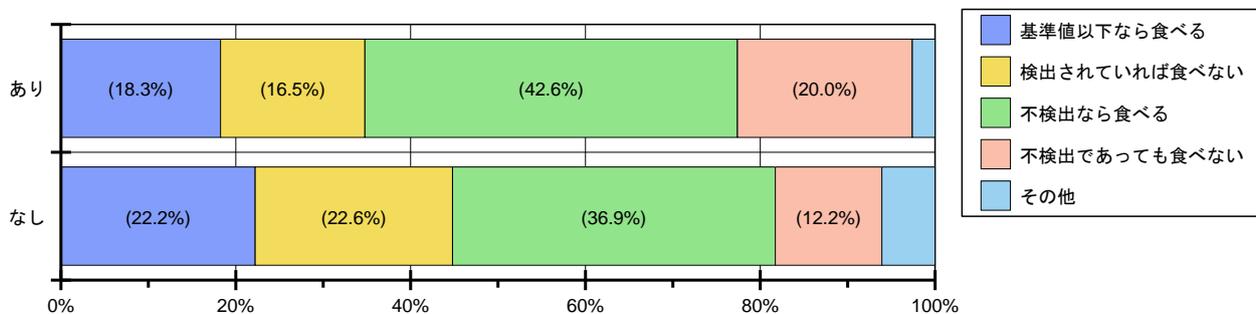


図10-3 一度基準値を超えた食品の購買活動（未成年の家族の有無別）

問 1 1 福島第一原子力発電所事故後、食品を購入するとき、何か変わったことはありますか。（複数回答）

- 1 産地表示を必ず確認するようになった
- 2 宮城県産以外のものを買うようになった
- 3 国産より外国産を買うようになった
- 4 復興支援のため、宮城県産のものを積極的に買うようになった
- 5 出荷制限などの情報を積極的に集めるようになった
- 6 店頭に表示している店を選んで行くようになった
- 7 水道水の使用には気を遣い、ミネラルウォーターを買うようになった
- 8 特に変わりはない
- 9 その他

原発事故後の食品購入手動の変化としては、「産地表示を必ず確認するようになった」（34.1%）、「復興支援のため、宮城県産のものを積極的に買うようになった」（16.7%）が高い一方、「宮城県産以外のものを買うようになった」（5.8%）、「国産より外国産を買うようになった」（4.6%）は低く、比較的冷静な対応がなされている。

男女間では、「復興支援のため、宮城県産のものを積極的に買うようになった」の項目で男性の方がその割合が高く、「出荷制限などの情報を積極的に集めるようになった」の項目では女性の割合が高い傾向がみられる。

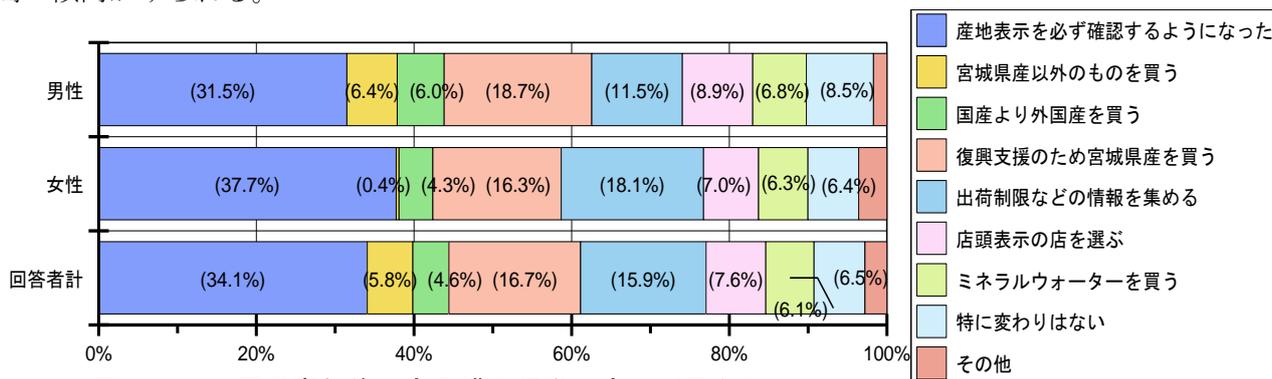


図11-1 原発事故後の食品購入手動の変化（男女別）

年代別ではバラツキがあるように見えるが、これは回答者が少ないためで有意差は見られない。

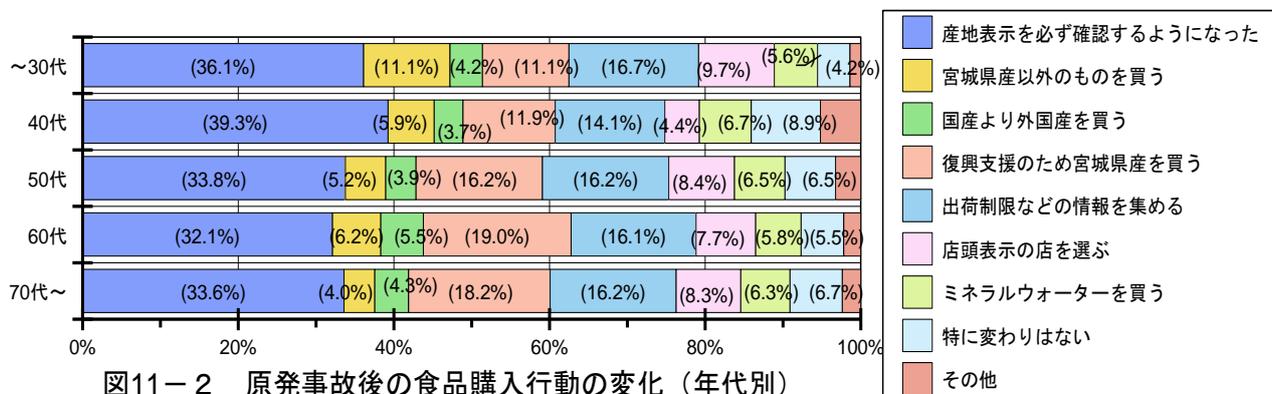


図11-2 原発事故後の食品購入手動の変化（年代別）

未成年の家族の有無間に有意差は見られない。

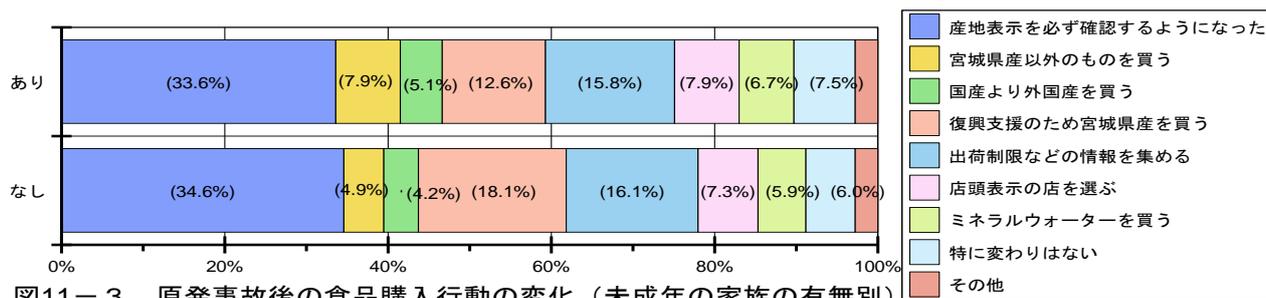


図11-3 原発事故後の食品購入行動の変化（未成年の家族の有無別）

\*この調査項目については、『品目によって選択肢が異なる』などの意見もあり、回答者にとって答えにくい設問であったため、項目毎の有意差が明確に示せなかった。

問12 あなたは以下の言葉に対して、怖いものだというイメージがありますか。  
お気持ちにもっとも近いものをそれぞれ1つ選んでください。

- 1 自動車事故 2 飛行機事故 3 地震 4 喫煙(受動含む) 5 食中毒 6 アレルギー反応  
7 食品添加物 8 BSE (俗に狂牛病) 9 残留農薬 10 放射性物質による汚染 11 アスベスト  
12 テロ 13 銃・刃物 14 電磁波 15 最先端医療 16 遺伝子組換え技術

評価	1 そう思う	2 ややそう思う	3 どちらともいえない
	4 ややそう思わない	5 そう思わない	

身近にある様々な危機に対するリスクの感じ方について、「そう思う」、「ややそう思う」回答者数でみたところ、「放射性物質による汚染」「地震」「残留農薬」「自動車事故」「アスベスト」「テロ」の順になっている。

項目別に見ると、「自動車事故」「飛行機事故」「地震」「喫煙(受動含む)」「食品添加物」「残留農薬」「テロ」「銃・刃物」「電磁波」には、男女別・年代別・未成年の家族の有無別すべてにおいて有意差は見られなかった。

年代別では「BSE (俗に狂牛病)」「アスベスト」で有意差があり、70代以上で割合が高い傾向がある。「アレルギー反応」「放射性物質による汚染」「遺伝子組換え技術」では男性より女性、「最先端医療」では70代以上の回答割合が高くなる傾向にあり、それぞれのライフスタイルに関わり(見聞

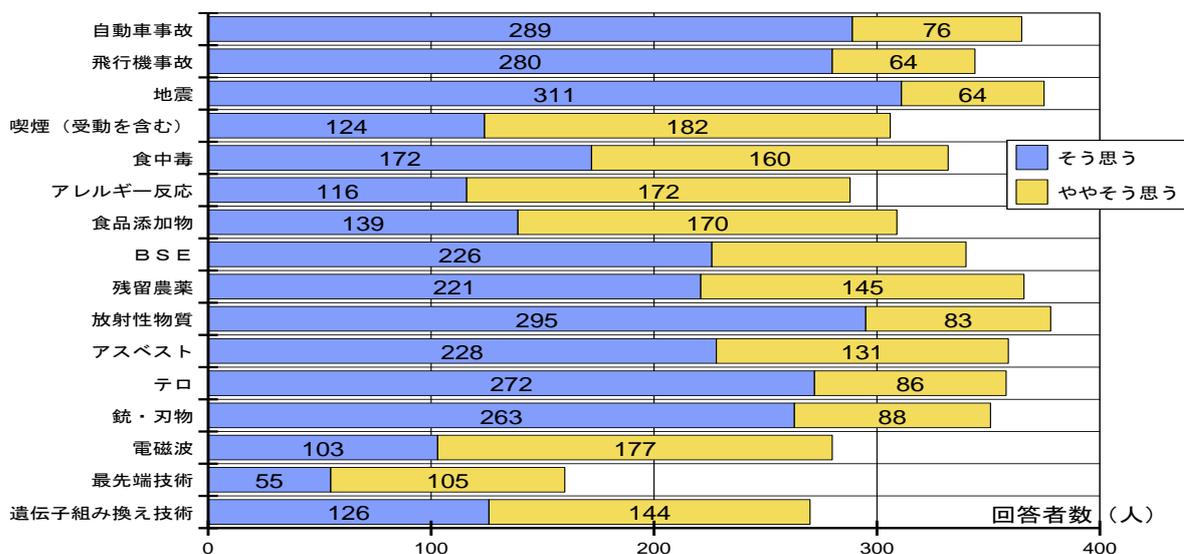


図12-1 怖いイメージのもの（「そう思う」・「ややそう思う」の合計）

きする等の経験を含む)のある項目に対する感受性の高さがうかがえる。

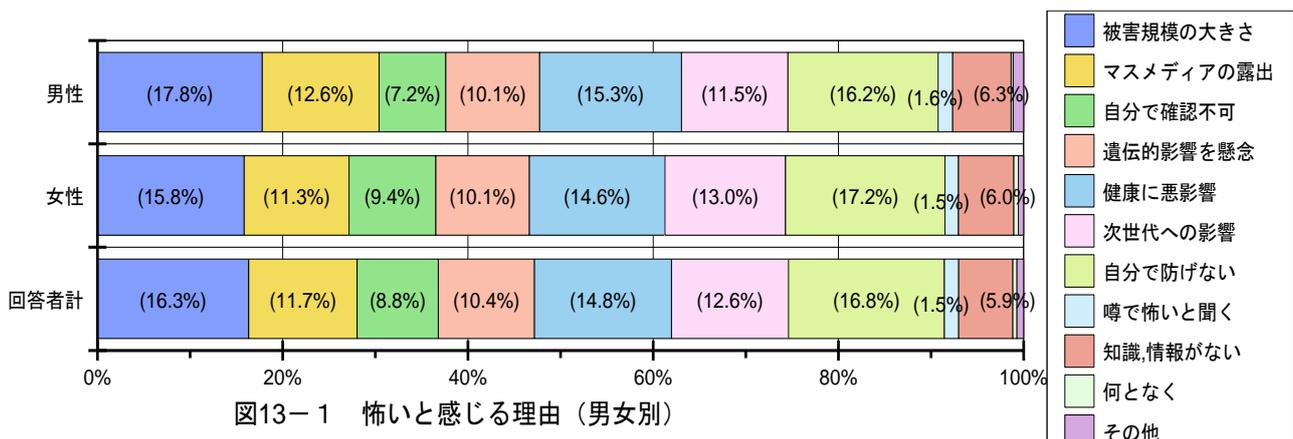
\*年代別，未成年の家族の有無別の図は省略。

問 13 あなたが日常生活の中で何かを怖いと感じる場合，その理由にはどんなものがありますか。（複数回答）

- |    |                           |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
|----|---------------------------|--|--|--|--|--|--|--|--|--|
| 1  | 被害の規模が大きい                 |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 2  | テレビや新聞で事故や被害の報道をよく見聞きするから |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 3  | 自分の目で見ることができないことだから       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 4  | 被害による遺伝的影響がでるかもしれないから     |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 5  | 健康に悪影響があるかもしれないから         |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 6  | 次世代への負の遺産があるかもしれないから      |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 7  | 自分の力では防いだりすることができないから     |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 8  | 身近な人の話や噂で怖いと聞くから          |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 9  | 知識や情報がないから                |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 10 | 特に理由はないがなんとなく             |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| 11 | その他                       |  |  |  |  |  |  |  |  |  |

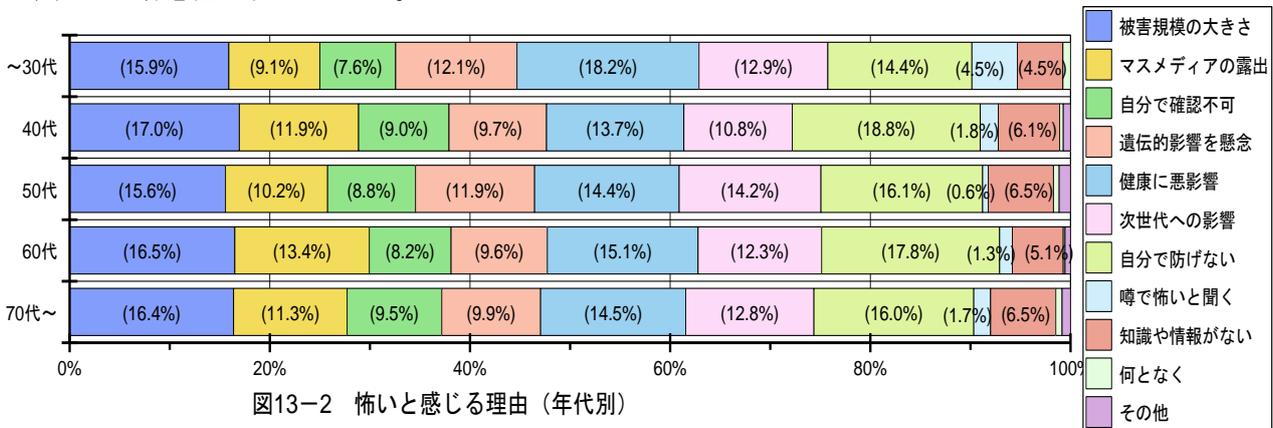
日常生活の中で怖いと感じる理由については、「自分で防げないから」「被害の規模が大きい」場合や「健康に悪影響があるかもしれないから」「テレビや新聞で事故や被害の報道をよく見聞きする」の順で多く，見えないものへの不安に対して「怖い」と感じる事がうかがえる。

男女別では有意差があり，「自分の目で見ることができないことだから」で女性の回答割合が高い

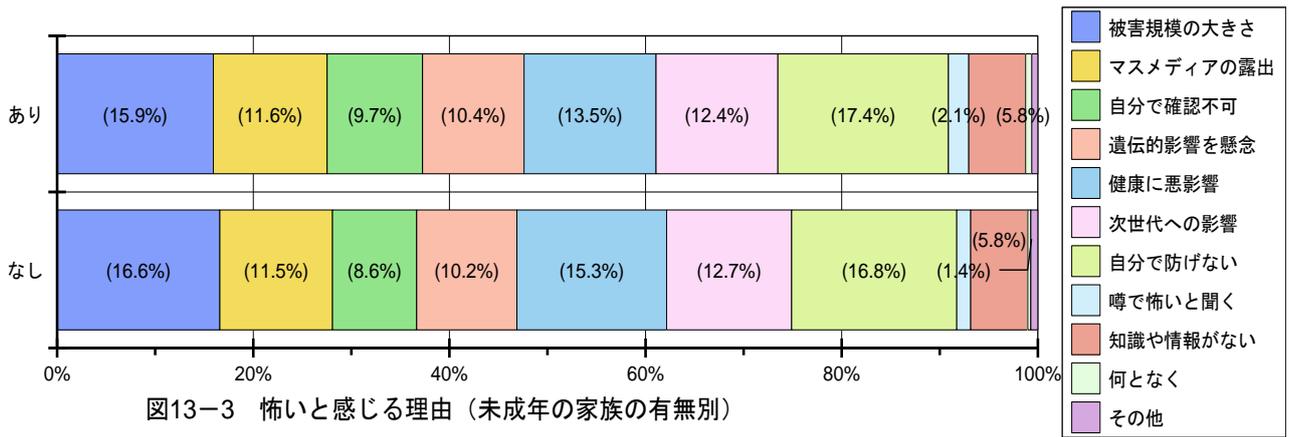


傾向がある。

年代別に有意差は見られない。



未成年の家族の有無別では有意差が見られない。



問14 私たちの身近には様々な放射線があります。次の1～10について、あてはまる番号1つを選んでください。

- 1 自然放射線
- 2 ジャガイモの発芽防止に放射線
- 3 香辛料の殺菌に放射線（日本では不許可）
- 4 ラジウム、ラドンは天然の放射性物質を含んでいる
- 5 X線は体に残らない
- 6 放射線治療は難治ガン治療に有効
- 7 空港では放射線を使って手荷物検査をしている
- 8 医療器具の多くは放射線によって殺菌が行われている
- 9 国際放射線防護委員会等の勧告を受けて日本も防護に取り組んでいる
- 10 基準値以下の食品のみ流通されている

認知	1 よく知っている	2 聞いたことがある	3 知らない
----	-----------	------------	--------

不安を感じる程度	1 安心	2 やや安心	3 どちらともいえない
	4 やや不安	5 不安	

認知度の間では、「よく知っている」を2点、「聞いたことがある」を1点として加重平均をとり比較したところ、「空港では放射線を使って手荷物検査をしている」（562点）「ラジウム、ラドンは天然の放射性物質を含んでいる」（500点）「基準値以下の食品のみ流通されている」（491点）「自然放射線」（464点）の順で認知度が高い。

また、不安の程度は認知度と同様に「不安」を2点、「やや不安」を1点として加重平均して傾向をみたところ、「香辛料の殺菌に放射線（日本では不許可）」（348点）「ジャガイモの発芽防止に放射線」（233点）のように、身近な食品に関連する項目で不安の度合いが大きい傾向にある。

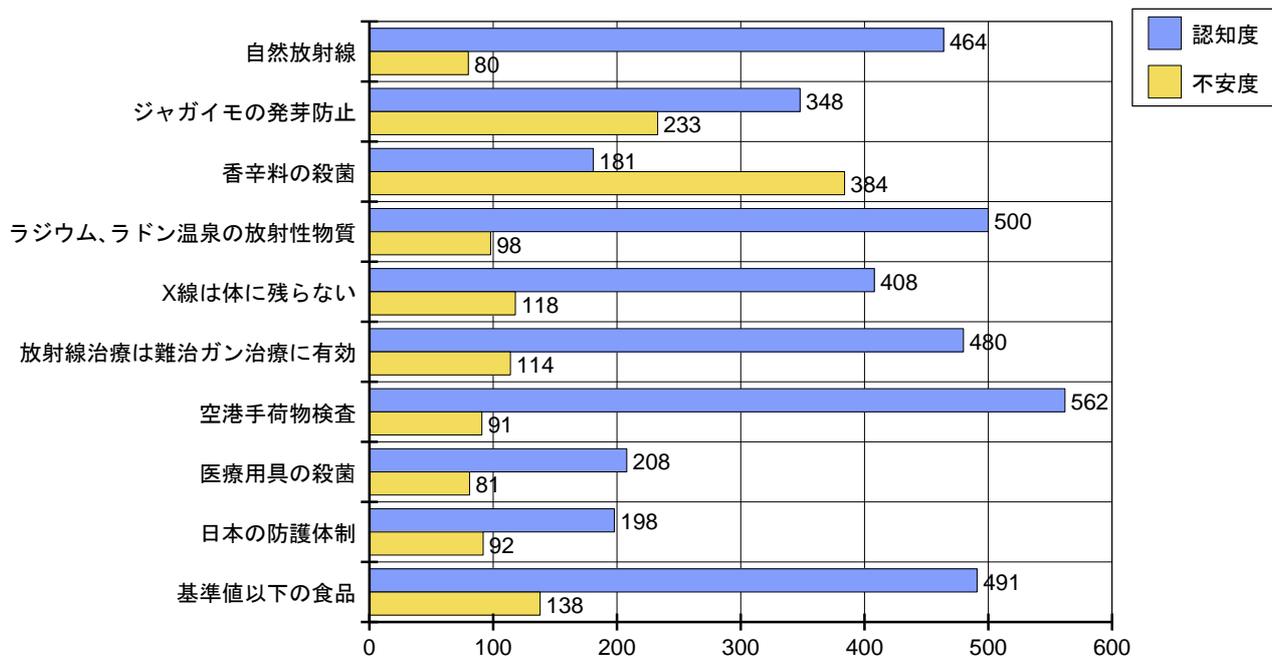


図14 身近な放射能に関する認知と不安を感じる程度

## Ⅱ 食の安全安心について

### 問 15 食の安全安心全般について、不安を感じていますか。（単一回答）

1 不安を感じる	2 やや不安を感じる	3 どちらともいえない
4 あまり不安を感じない	5 全く不安を感じない	6 その他

食の安全安心全般についての不安に関しては、「不安を感じる」（25.6%）、「やや不安を感じる」（54.4%）を合わせて80.0%と、ほとんどの回答者が食の安全安心全般について不安を感じているようである。昨年度（平成23年度）のアンケート調査結果では、「不安を感じる」（36.7%）、「やや不安を感じる」（44.9%）を合わせて81.6%であり、不安を感じている方の割合に変化はないが、「不安を感じる」人の割合は昨年度に比べ11.1ポイント減少しており、不安の度合いは和らいでいる。

男女間に有意差が見られ、少数ではあるが、男性は女性に比べて「あまり不安を感じない」の割合が高い傾向にある。

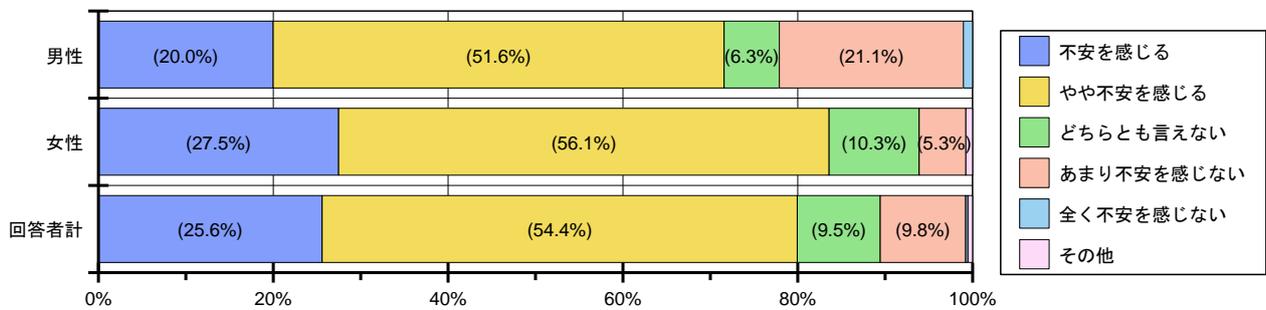


図15-1 食の安全安心全般についての不安（男女別）

年代間には有意差は見られない。

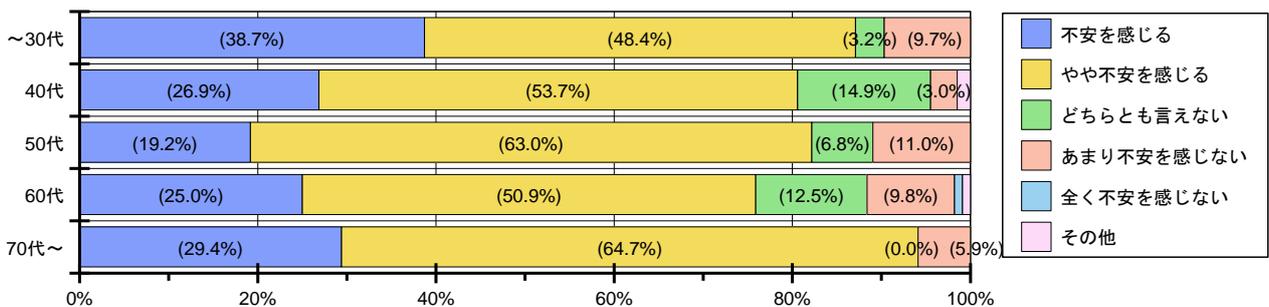


図15-2 食の安全安心全般についての不安（年代別）

未成年の家族の有無間にも有意差は見られない。

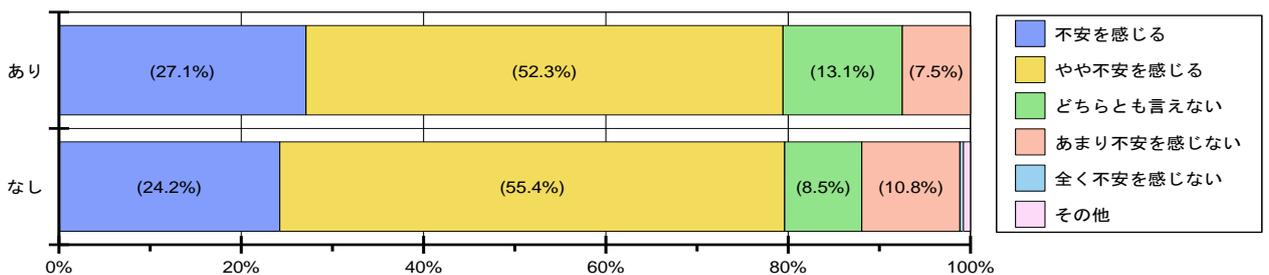


図15-3 食の安全安心全般についての不安（未成年の家族の有無別）

### 問 16 食の安全性について、下記の項目各々に、どのくらい不安を感じていますか。

(5段階評価)

1 食品添加物について	2 残留抗生物質について	3 環境汚染物質について
4 残留農薬について	5 異物混入について	6 アレルギー物質について
7 有害微生物について	8 家畜伝染病について	9 遺伝子組換え食品について
10 産地表示の信頼性	11 期限表示の信頼性	12 成分表示の信頼性
13 放射性物質の濃度が基準値以下の食品の信頼性		
14 健康食品の安全性	15 輸入食品の安全性	16 その他

評価	1 強く感じている	2 やや感じている	3 どちらともいえない
	4 あまり感じていない	5 全く感じていない	

不安を感じている項目としては、「残留農薬」(4.30点)がトップで、次いで「環境汚染物質」(4.29点)、「家畜伝染病」(4.13点)、「残留抗生物質」(4.12点)の順である。

昨年度のアンケート調査結果では、「環境汚染物質」,「残留農薬」,「残留抗生物質」,「輸入食品の安全性」の順であり、昨年同様「環境汚染物質」への不安が依然として大きい。

今年度新たに項目に加えた「放射性物質基準値以下の食品の信頼性」については、比較的不安を感じていない(3.67)。

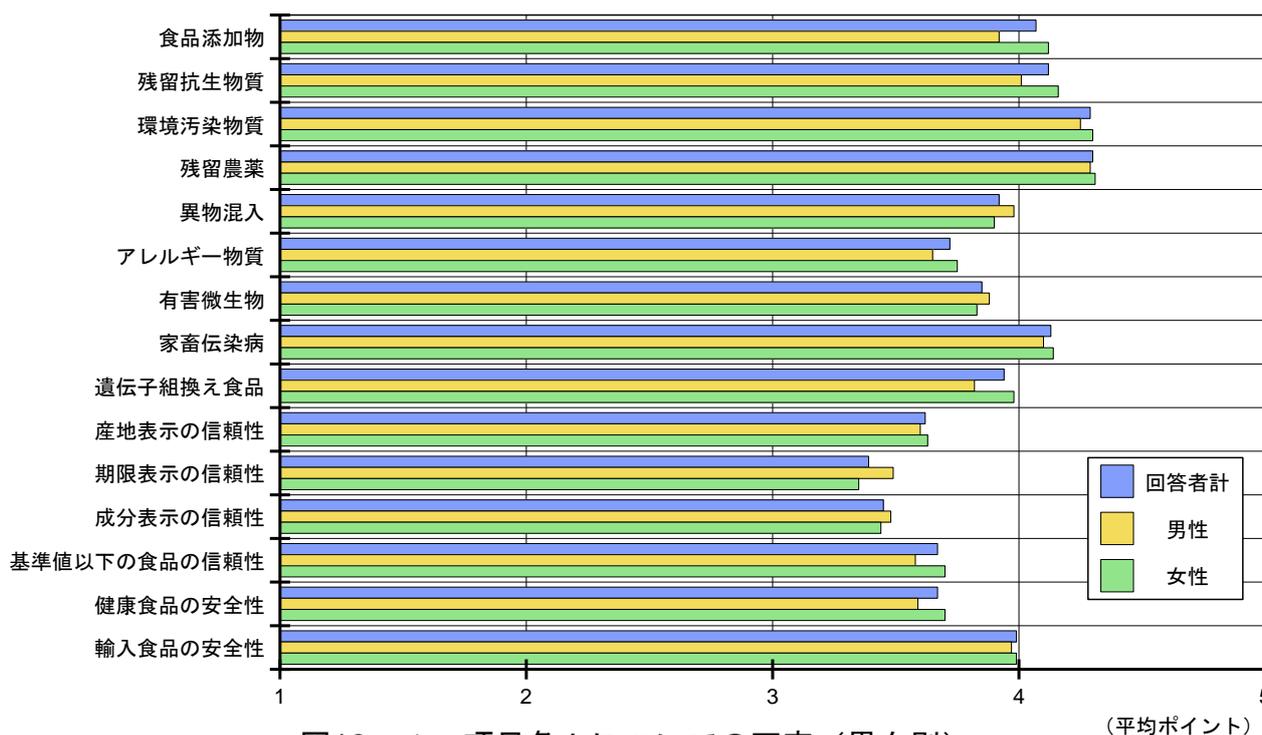


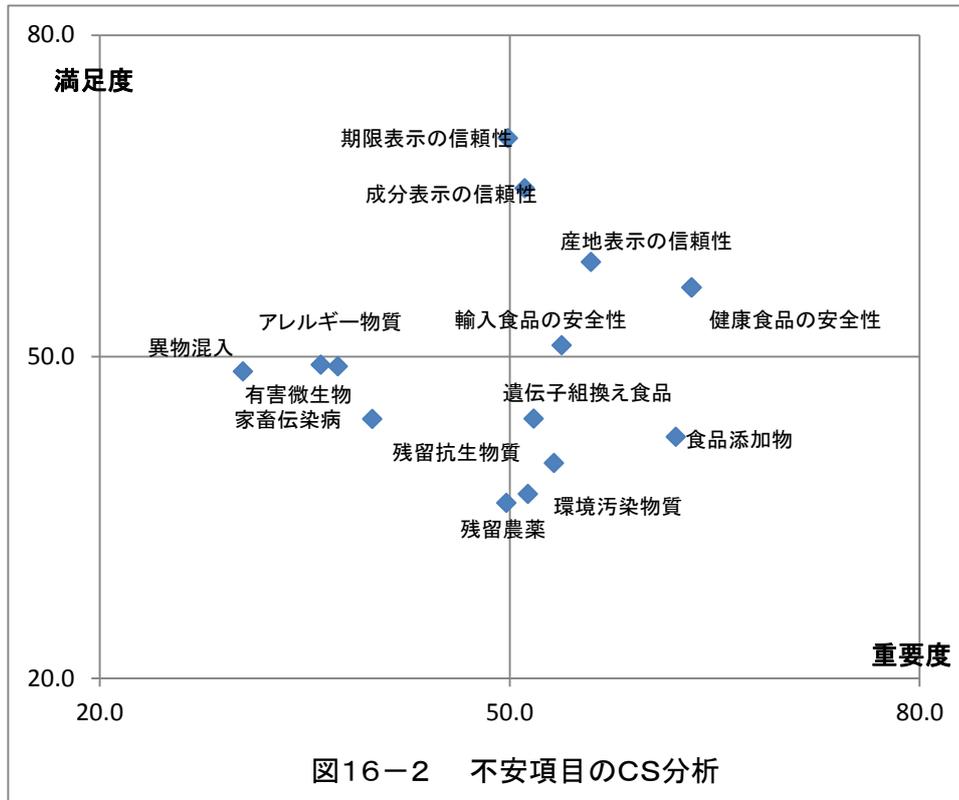
図16-1 項目各々についての不安 (男女別)

※ポイントは、「強く感じている」を5点,「やや感じている」を4点,「どちらとも言えない」を3点,「あまり感じない」を2点,「全く感じない」を1点とし,平均したもの。

一方,食の安全安心全般についての不安と,項目各々についての不安の関連性について,満足度調査(CS分析)の手法を用いて分析すると,不安の度合いが強く(満足度が低く),かつ,食の安全安心全般への不安に対して影響度が高い(重要度が高い)項目としては,「食品添加物」がトップで,次いで「輸入食品の安全性」,「残留抗生物質」,「残留農薬」,「環境汚染物質」,「遺伝子組換え食品」の順となる。

平均ポイントだけを見ると「食品添加物」は,「家畜伝染病」,「残留抗生物質」に次で5番目であ

るが、食の安全安心全般に対する不安への影響度を考慮すると、「残留抗生物質」、「輸入食品の安全性」より優先的に軽減していく措置を講ずれば、食の安全安心全般に対する不安が軽減される効果が高いことがうかがえる。



問17 昨年と比較して、食の安全安心について意識の変化はありましたか。  
(単一回答)

- |                |                  |       |
|----------------|------------------|-------|
| 1 不安を感じるようになった | 2 やや不安を感じるようになった |       |
| 3 変わらない        | 4 やや不安を感じなくなった   |       |
| 5 不安を感じなくなった   | 6 以前から不安に思っていない  | 7 その他 |

昨年度の食の安全安心に関する意識は、「不安を感じるようになった」(46.4%)、「やや不安を感じるようになった」(36.2%)を合わせて82.6%と非常に高く、不安の度合いが増した様子が見えたと感じた。今年度は、「不安を感じるようになった」が14.4ポイント低下したが(32.0%)、「不安を感じなくなった」「やや不安を感じなくなった」「以前から不安に思っていない」が5%程度と極めて低く、依然として「不安」を感じている人が多い。

男女間に有意差は見られない。

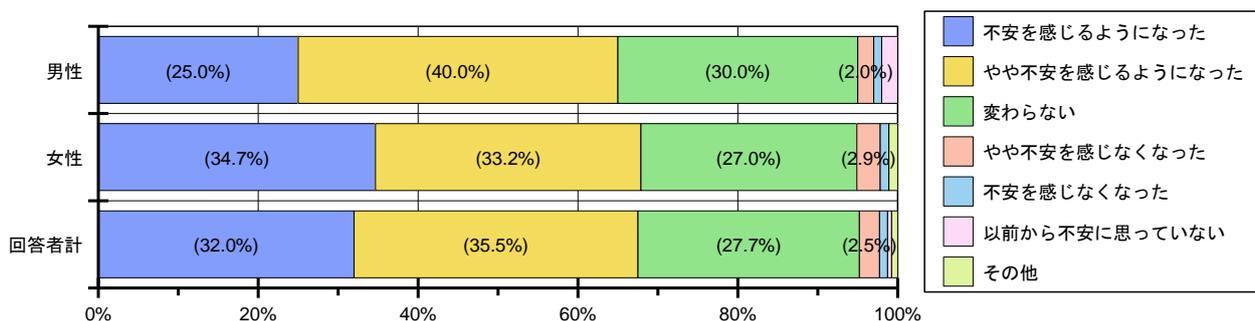


図17-1 昨年と比較した食の安全安心について意識の変化 (男女別)

年代間には有意差は見られない。

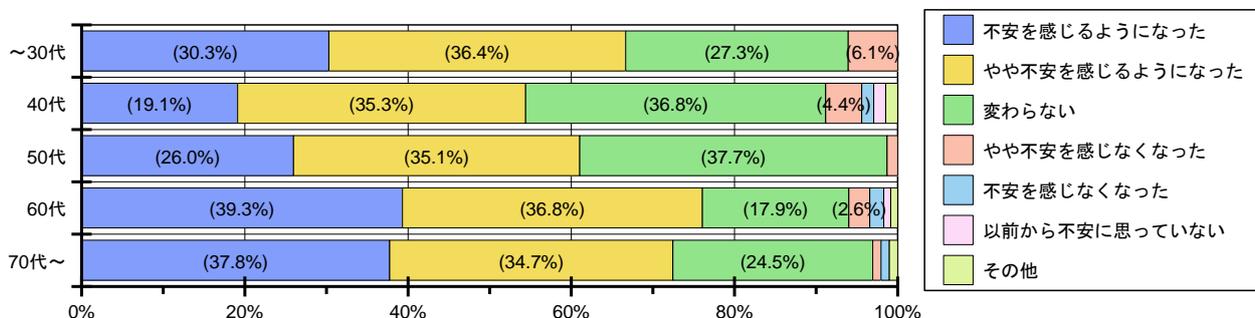


図17-2 昨年と比較した食の安全安心について意識の変化 (年代別)

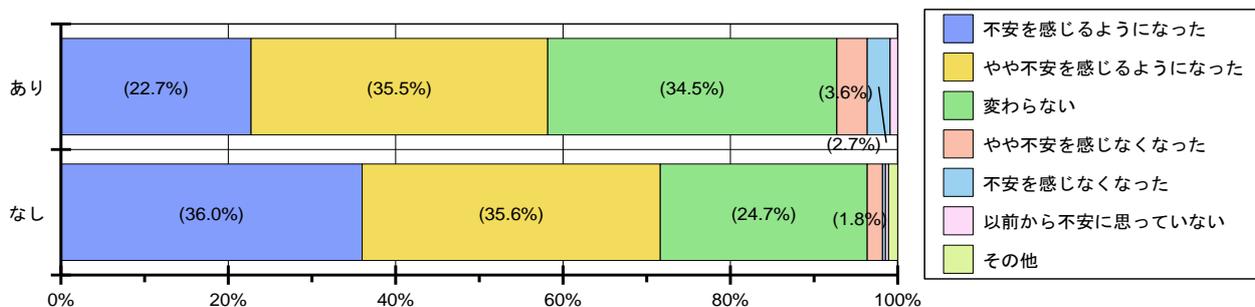


図17-3 昨年と比較した食の安全安心について意識の変化 (未成年の家族の有無別)

未成年の家族の有無間では有意差は見られない。

問18 食品の安全性を確保するため、下記の取り組みについてどのくらい重要だと思いますか。また、その取り組みに対して現在十分に行われていると思いますか。  
(5段階評価)

- |                    |                      |
|--------------------|----------------------|
| 1 食品関係法令の改正        | 2 食品の安全性を証明する第三者機関認証 |
| 3 食品製造企業の自主管理体制の強化 | 4 食品の衛生・監視指導の強化      |
| 5 輸入食品の検査体制の強化     | 6 県民総参加運動の推進         |
| 7 消費者への支援強化        | 8 食に関する正しい情報の提供      |
| 9 食品表示の指導・監視体制の強化  | 10 違反、事件、事故の速やかな情報公開 |
| 11 その他             |                      |

重要度	1 大変重要だと思う	2 やや重要だと思う	3 どちらともいえない
	4 あまり重要と思わない	5 全く重要と思わない	
満足度	1 十分行われている	2 大体行われている	3 どちらともいえない
	4 あまり十分でない	5 全く不十分である	

食の安全安心を確保するための各取り組みについて、大変重要だと考える回答者が多い（重要度が高い）が、十分に行われていないと認識されている（満足度が低い）取り組みをより優先的に取り組むべきと考え、「違反、事件、事故の速やかな情報公開」、「輸入食品の検査体制の強化」、「食に関する正しい情報の提供」、「食品の衛生・監視指導の強化」の順である。

昨年度のアンケート調査結果でも「違反、事件、事故の速やかな情報公開」の満足度が低く、情報

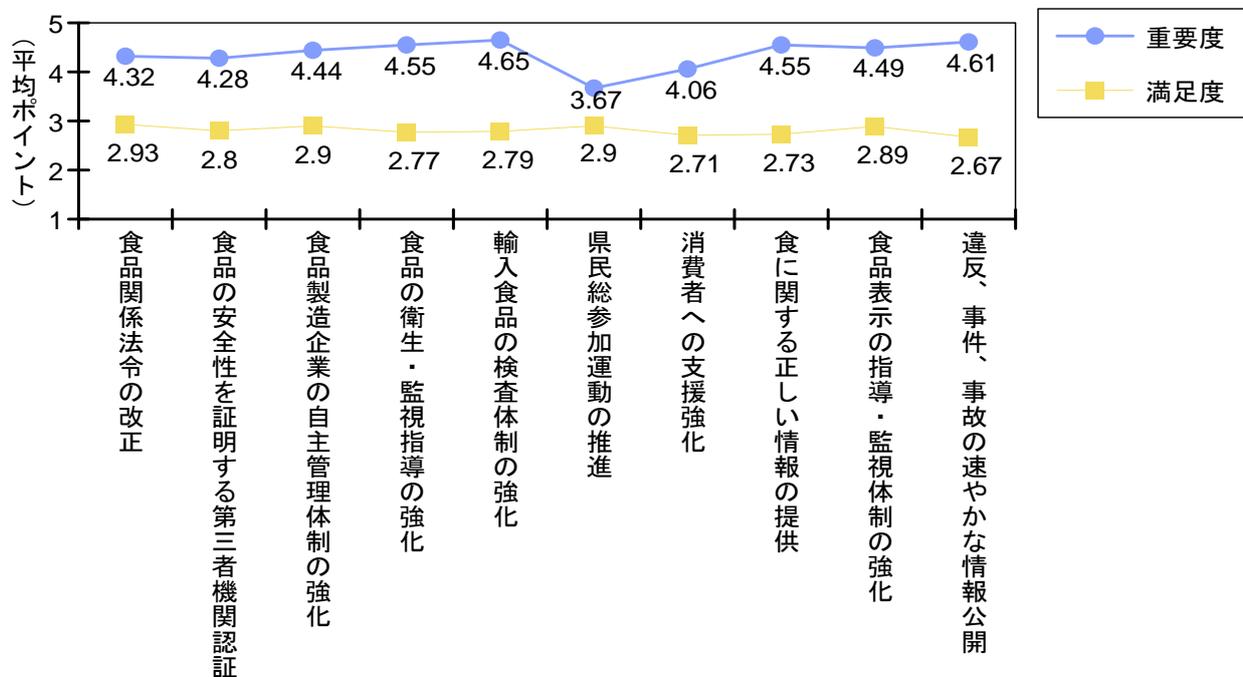


図18 食品の安全安心を確保するための取り組みの重要度と満足度

公開に関する意識の高まりが見られる。

※ポイントは、「大変重要だと思う」「十分行われている」を5点、「やや重要だと思う」「大体行われている」を4点、「どちらとも言えない」を3点、「あまり重要と思わない」「あまり十分でない」を2点、「全く重要と思わない」「全く不十分である」を1点とする。

い」を2点, 「全く重要と思わない」「全く不十分である」を1点とし平均したもの。

問19 現在の食に対する価値観について、優先度が高いものはどれですか。  
(優先度の高い順に3つまで)

- |                       |              |            |
|-----------------------|--------------|------------|
| 1 美味しいものを追求したい        | 2 高価なものを摂りたい | 3 健康に配慮したい |
| 4 安全性に配慮したい           | 5 食費を節約したい   |            |
| 6 価格にこだわらず、国産品にこだわりたい |              |            |
| 7 価格にこだわらず、県産品にこだわりたい | 8 その他        |            |

現在の食に対する価値観について、1位～3位に挙げられた項目を単純合計すると、食に対する価値観としては、「安全性に配慮したい」(367人)、「健康に配慮したい」(361人)と回答する人が圧倒的に多く、次いで「美味しいものを追求したい」(142人)、「価格にこだわらず、国産品にこだわりたい」(122人)、「食費を節約したい」(105人)、「価格にこだわらず、県産品にこだわりたい」(74人)が続く。

昨年度のアンケート調査結果でも、国産品、県産品へのこだわりが低くなっていたが、今年もその傾向が続いている。

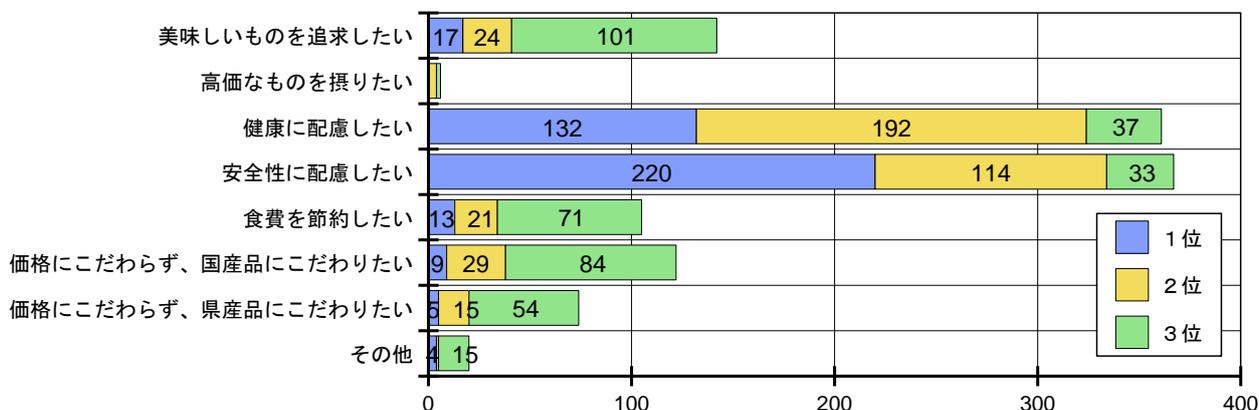


図19-1 食に対する価値観 (単純合計)

男女間に有意差は見られない。

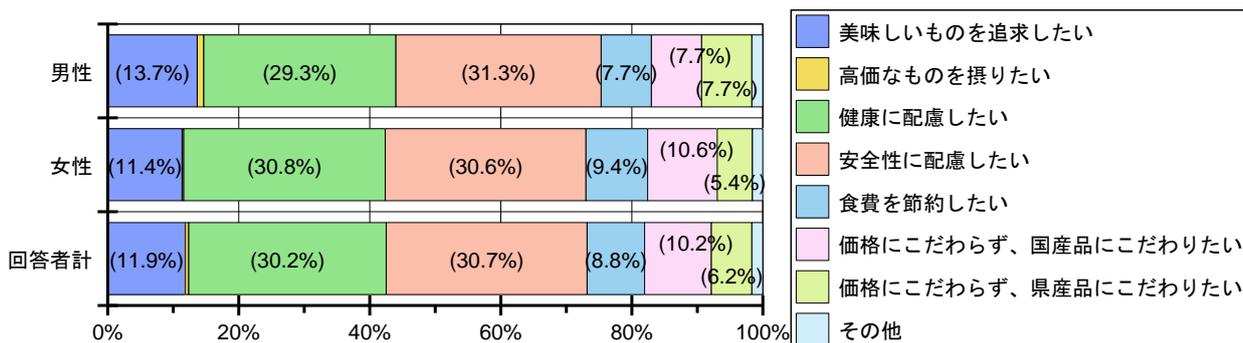


図19-2 食に対する価値観 (単純合計, 男女別)

年代間には有意差が見られ、～30代と40代は「食費を節約したい」が高い。逆に70代は「食費を節約したい」が低い傾向にある。家計に余裕が少ないと思われる若い世代ほど「食費の節約」を気にせざるを得ないことがうかがえる。

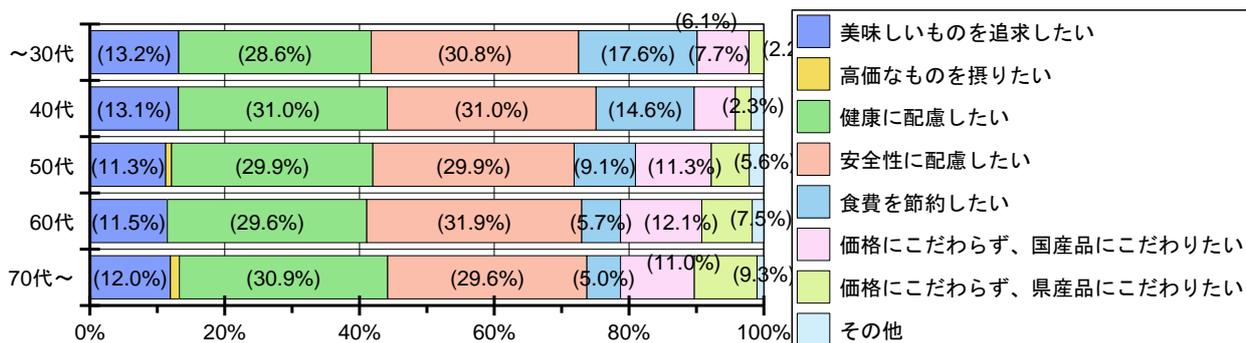


図19-3 食に対する価値観（単純合計，年代別）

未成年の家族の有無間でも有意差があり、未成年の家族ありで「食費を節約したい」割合が高い。

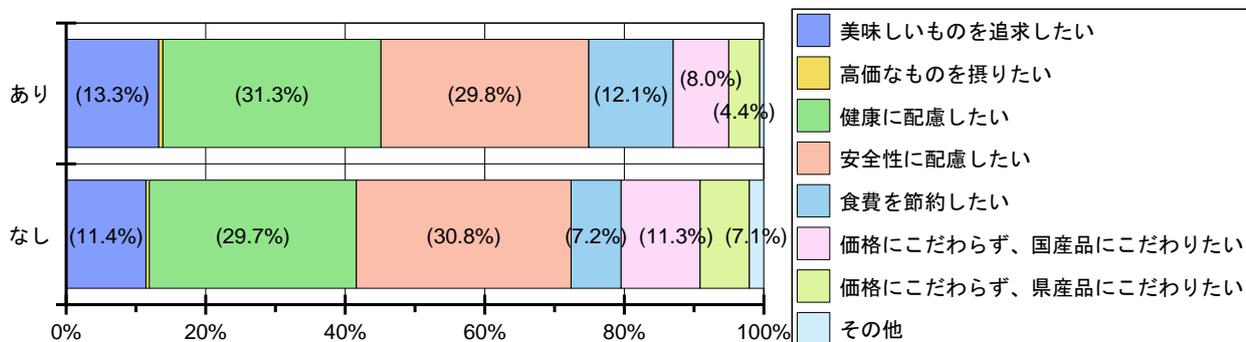


図19-4 食に対する価値観（単純合計，未成年の家族の有無別）

問20 さらに食の安全安心に向けた取り組みを実践するために、県が取り組むべきこととして望むのはどれですか。（複数回答）

- 1 生産者の取り組みへの支援
- 2 安全な農水産物生産環境づくりの支援
- 3 食関連事業者に対する支援
- 4 生産者に対する安全性の監視及び指導の徹底
- 5 食関連事業者に対する安全性の監視及び指導の徹底
- 6 食品表示の適正化の推進
- 7 情報の収集、分析及び公開
- 8 消費者、生産者及び食関連事業者との相互理解の促進
- 9 県民総参加運動の推進
- 10 県民意見の施策への反映
- 11 (県の)体制の整備及び関係機関等との連携強化
- 12 審議会（「みやぎ食の安全安心推進会議」）の機能強化
- 13 その他

食の安全安心に向けて県には、「安全な農水産物生産環境づくり支援」（13.3%）、「生産者に対する安全性の監視及び指導の徹底」（12.7%）、「食関連事業者に対する安全性の監視及び指導の徹底」（11.4%）、「生産者の取り組みへの支援」（11.1%）、「食品表示の適正化の推進」（10.1%）に取り組むことが求められている。

昨年度のアンケート調査結果では、「安全な農水産物生産環境づくり支援」、「生産者の取り組みへの支援」、「生産者に対する安全性の監視及び指導の徹底」、「食関連事業者に対する安全性の監視及び指導の徹底」、「情報の収集、分析及び公開」の順であり、生産者や食関連事業者の監視及び指導の徹底を求める傾向が高い。

男女間では有意差が見られない。

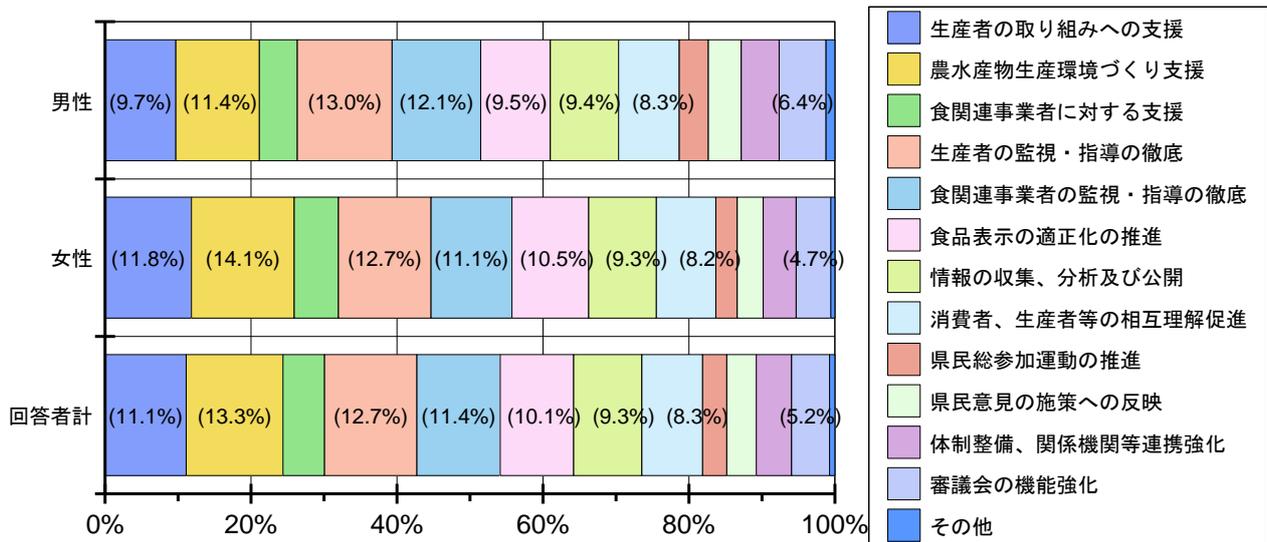


図20-1 食の安全安心に向けて取り組むべきこと（男女別）

年代間では30代や40代で「生産者の取り組み支援」や「農水産物生産環境づくり支援」に取り組むべきとする割合がやや高い傾向がみられる。

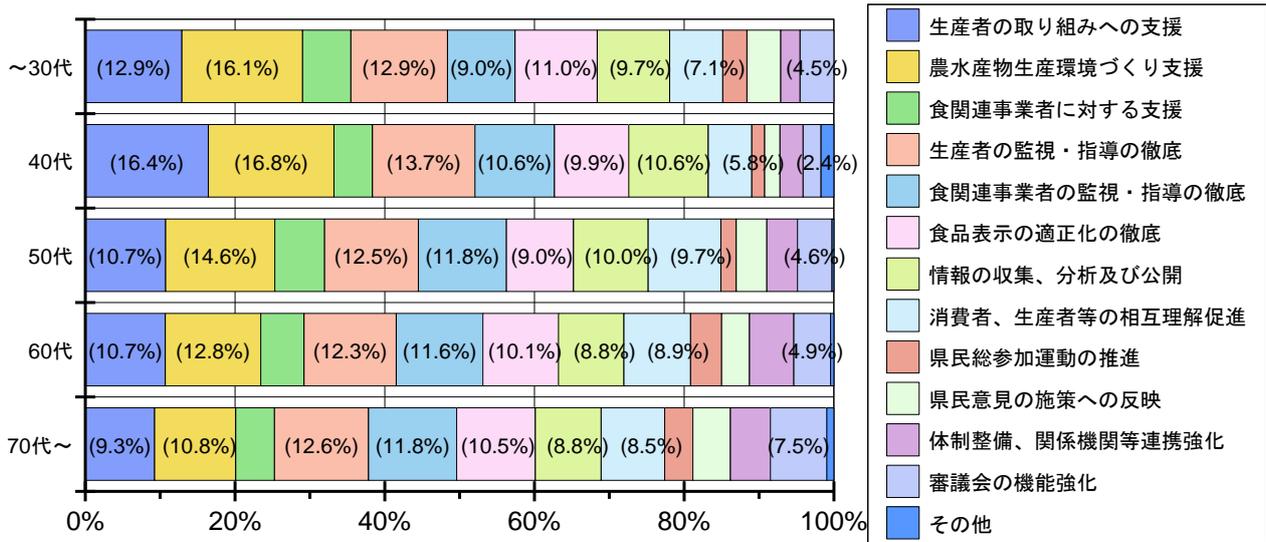


図20-2 食の安全安心に向けて取り組むべきこと（年代別）

未成年の家族の有無間では有意差は見られない。

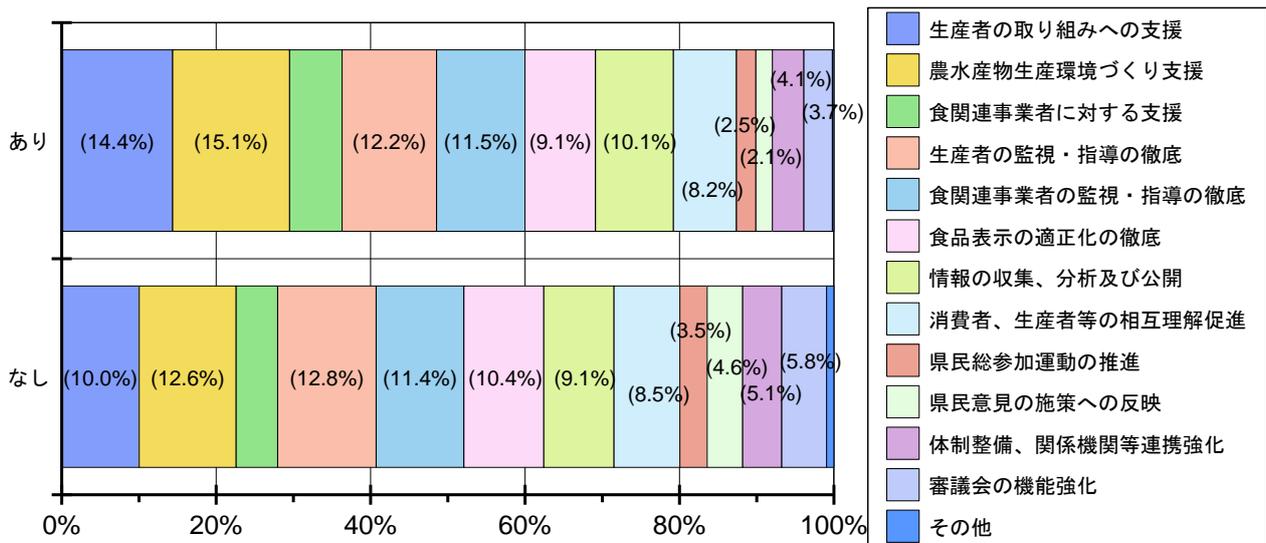


図20-3 食の安全安心に向けて取り組むべきこと（未成年の家族の有無別）

問 2 1 県からの情報提供について、十分だと感じていますか。（単一回答）

評価	1 十分である	2 おおむね十分である	3 どちらともいえない
	4 あまり十分でない	5 十分でない	6 その他

県からの情報提供の満足度については、「どちらともいえない」が約4割、「十分である」と「概ね十分である」が合わせて3割強、「あまり十分でない」と「十分でない」が合わせて3割弱で、情報提供に満足している人と不満を持った人がほぼ同数存在するといえる。

男女間での有意差は見られない。

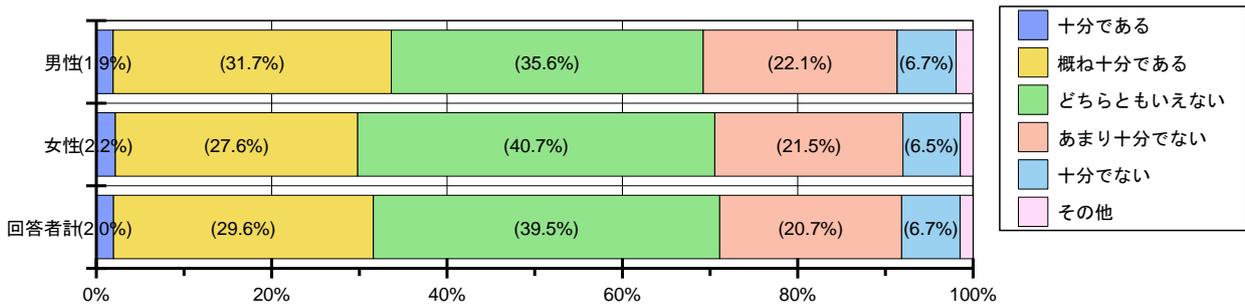


図21-1 県からの情報は十分か（男女別）

年代間の有意差も見られない。

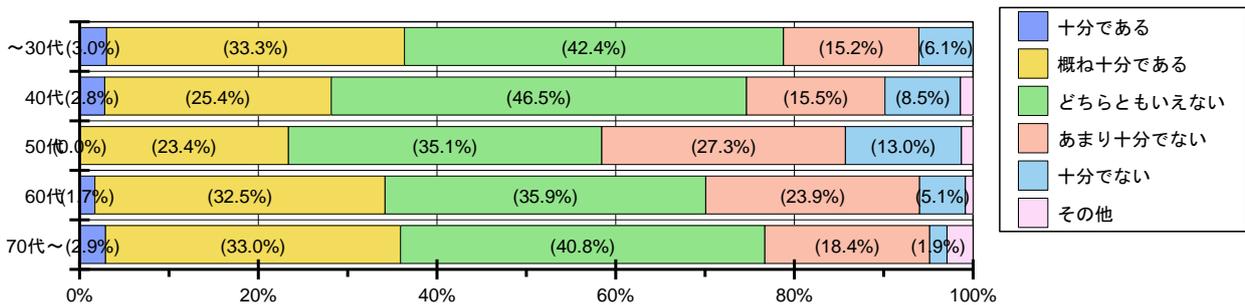


図21-1 県からの情報は十分か（年代別）

未成年の家族の有無別でも有意差は見られない。

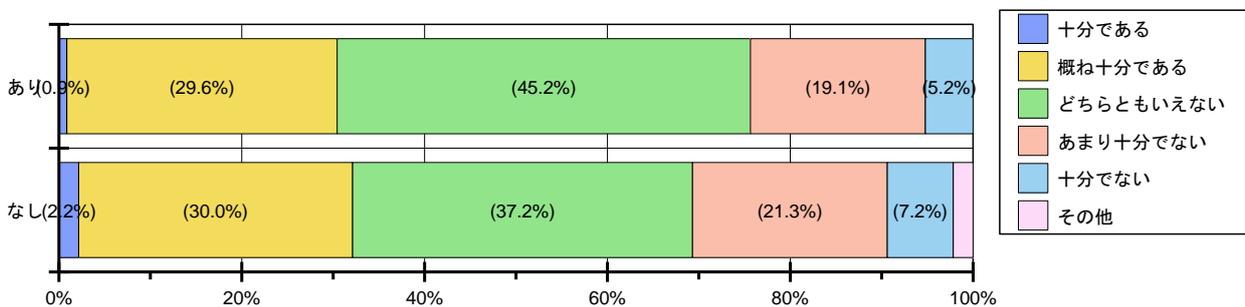


図21-1 県からの情報は十分か（未成年の家族の有無別別）

問22 県からの情報提供について、どのような内容の情報を知りたいですか。  
(複数回答)

- 1 法令等の改正や行政上の手続き
- 2 食中毒や自主回収等
- 3 食品表示の見方
- 4 国や県が行っている対策や事業
- 5 消費者モニターの活動 (セミナーの内容等)
- 6 食の安全安心の確保に取り組んでいる生産者・事業者の紹介
- 7 その他

知りたい情報は、「食の安全安心の確保に取り組んでいる生産者・事業者の紹介」(24.2%)、「国や県が行っている対策や事業」(19.7%)、「食中毒や自主回収等」(18.7%)、「食品表示の見方」(14.6%)の順で、特に日常生活で不可欠な食材提供を信頼できる生産者や事業者に委ねたいという傾向が強まっていると思われる。

男女間では有意差が見られない。

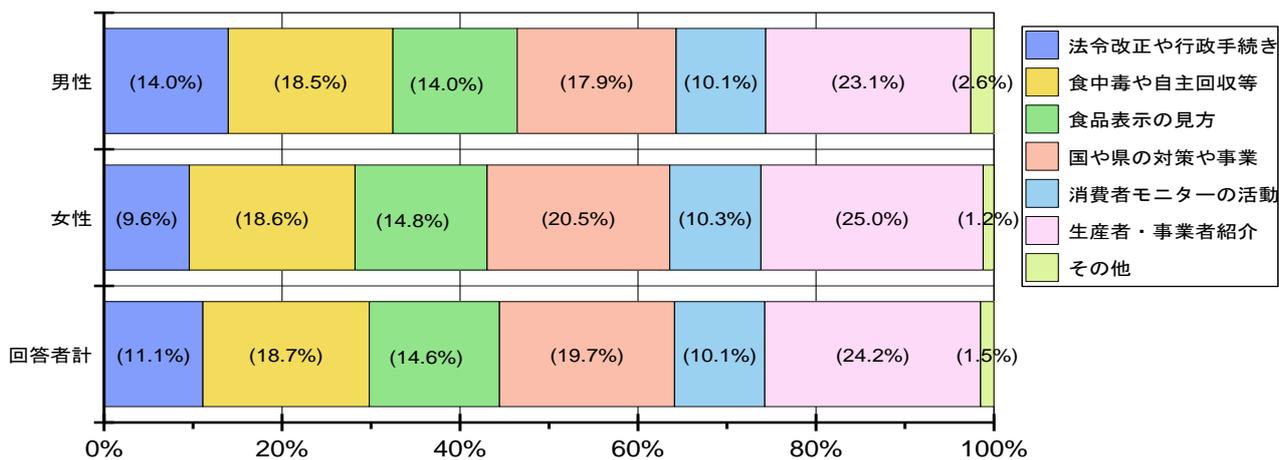


図22-1 県からの情報で知りたい内容 (男女別)

年代別でも有意差が見られない。

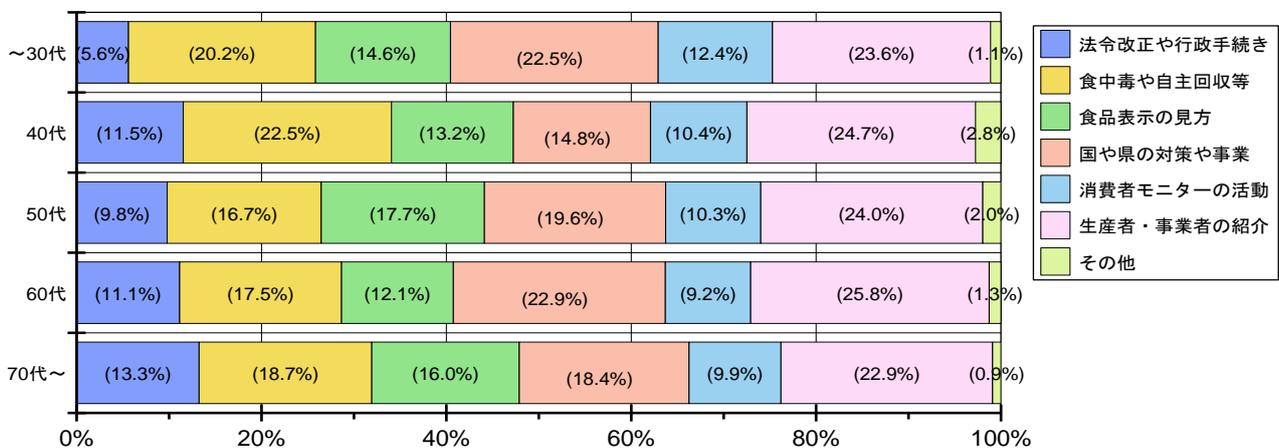


図22-2 県からの情報で知りたい内容 (年代別)

未成年の家族の有無別でも有意差は見られない。

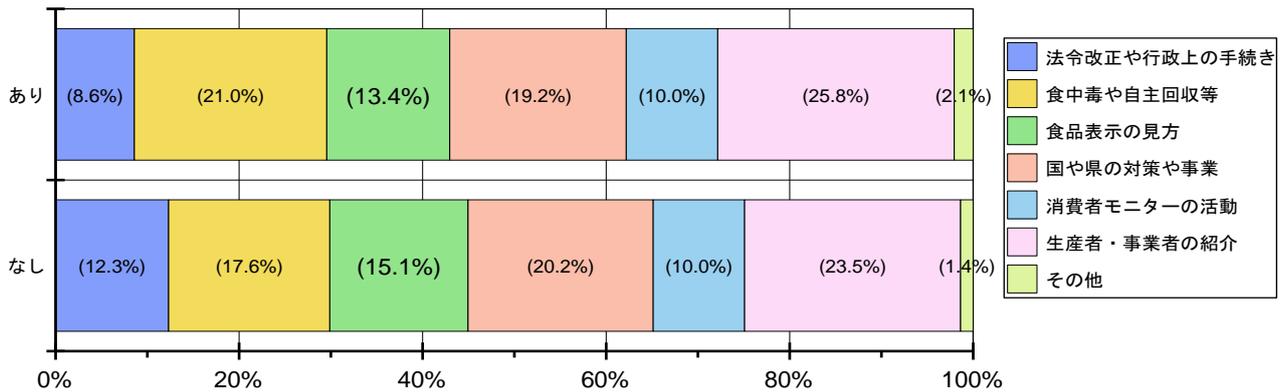


図22-3 県からの情報で知りたい内容（未成年の家族の有無別別）

### 問 2 3 食の安全安心全般, 国や県の施策についての意見, 提言

計 1 8 3 件の記述回答があり、その内容としては、放射性物質に関する意見が約半数で、「信頼性が高く」「身近な情報ツール（新聞やテレビ，ラジオ）による」「より速やかな」情報提供を求めるというものが多かった。

また、「生産者及び事業者と消費者との信頼構築」に関する提言等もあった。（個別の内容は省略）